改訂

現代文讀本

巻四

375.9
Ko11
資料室

41638
教科書文庫
4
810
41-1921
20000
53575

資料室
375.9
K011

大正十年一月二十二日
文部省檢定濟

東京高等師範學校附屬中學校內
國語漢文研究會編

改訂 現代文讀本

東京 目黑書店發兌

廣島大學
教
53575
文

改訂 現代文讀本 卷四

目次

一 英國大宰相ロイド、ヂョーヂ……河上肇……一
二 家康と老子道德經……長田偶得……一八
三 倫敦塔……夏目漱石……四〇
四 シーザー……坪內逍遙……六七
五 藝術の表現……厨川白村……九二
六 井伊大老の決意……中村春雨……一〇〇
七 十五代將軍の片影……高濱虛子……一一六
八 アレキサンダー論……三宅雪嶺……一三二
九 焚き火……國木田獨步……一四一

一〇　人生終に奈何……高山樗牛……一五二

目次終

改訂現代文讀本　卷四

一　英國大宰相ロイド・ヂョーヂ

ロイド・ヂョーヂはとう〳〵總理大臣に爲つた。

現代世界の政治家中、ロイド・ヂョーヂは私の最も好きな政治家である。蓋し彼は弱者の味方である。殊に彼は、不幸なる弱者が無慈悲なる強者の爲に、無道の壓制に苦しむを見る時は、憤然として己が面に唾せられたるが如くに嚇怒する。而して此の強者を抑へ、彼の弱者を扶くるが爲には、彼は殆ど己が身命の危きを顧みざる人である。古へ曾子の曰く、以て六尺の孤を託す可し、以て百里の命を寄す可

以て六尺の孤云々
可以託六尺之

孤。可以寄百里之命。臨大節而不可奪也。君子人與。君子人也。（論語）

し、大節に臨んで奪ふ可からず、君子人か君子人也」と、私が少年の頃より愛誦し來つた斯の一句は、今や計らずも人格化せられて、大英國の大宰相ロイド・ヂョーヂと爲つて現はれて居る。

ロイド・ヂョーヂは偉い。しかし彼を育てたリチャード・ロイドも亦偉い。若しリチャード・ロイド無かりせば、恐らく今日のロイド・ヂョーヂも居なかつたであらう。

大英國の大宰相ロイド・ヂョーヂは、ウェールズなる一村落の小學校長の息子である。四歲にして父を喪ひ、赤貧洗ふが如し。この時に當り、一人の寡婦と二人の孤とを一手に引受け、直ちに彼等一家の急を救つて吳れた人は、卽ちロイド・ヂョーヂの母の弟リチャード・ロイド其の人である。リチャード・ロイドも決して家に餘財ある人では無かつ

た。彼はラニスタムドウヰといふ村の靴屋であつた。而もこのあはれなる靴屋は、自分の姉及び其の連子を自分の家に引取り、痩腕一本で以て其の姉を養ひ、また三人の甥と姪（ロイド・ヂョーヂの父が亡くなつた時、母は姙娠中であつた。）とを育て上げ、彼自らは遂に獨身生活を貫いたのである。私は今日のロイド・ヂョーヂは以て六尺の孤を託すべき底の人物であると言つたが、彼を育てた叔父のリチャード・ロイド其の人が亦實に以て六尺の孤を託すべき底の人物であつた。

ロイド・ヂョーヂ自ら其の叔父の事を語つていふ、

私の叔父は一生結婚しなかつた。彼は、彼の姉の子供を敎育するといふ仕事をば、神聖且最高の義務として、之に一身を獻げた。其の義務に向つて、彼は彼の時と、彼の精力と、

又凡ての彼の金とを獻げた。

げにロイド・ヂョーヂに其の家を與へ、其の衣食を給したものは、彼の叔父であつた。彼に聖書を讀ましめ、天を畏れ人を愛すべき事を敎へたのも、亦彼の叔父であつた。彼の叔父は、彼が小學校に通學する頃には、日々其の下讀みと復習とを手傳ひ、後彼が辯護士を志して法律學の獨習を始むるや、彼の叔父は多少なりとも指導助力に役立たばやと思ふ一念より、寄る年波をも顧みず、己も亦始めて法律學の研究に志し、同じ燈火の下に、其の甥と共に苦學したものである。

ロイド・ヂョーヂは自ら斯う言うて居る。「貧乏な叔父と私とは、長時間卓を共にして、時代後れの佛蘭西語辭典や文典を矢鱈にひつくり返しながら、纔かに一語を綴り一文を屬するを常とした。之が吾々兩人の苦學法であつた。」

至誠にして云々
至誠而不動者未之有也（孟子）

かくて螢雪の功空しからず、彼が僅かに二十一歳の青年を以て辯護士試驗に及第するや、彼の叔父が骨身惜しまず稼ぎ貯めて置いた數百磅の資金は、此の時迄に彼の學資の爲、すべて消費し盡され、現に彼は折角辯護士試驗に及第しながら、法服新調の費用にさへ當惑したほどの有樣であつた。

洵にロイド・ヂョーヂ自らの言へるが如く、彼の叔父は彼を敎育するが爲に、彼の時と、彼の精力と、彼の金とをば、凡て費し盡したのであつた。

ロイド・ヂョーヂ自ら其の少年時代の生活を顧みていふ、吾々は殆ど生の肉を食べたことはない。さうして私は能く覺えて居るが、吾々の最大の贅澤は、日曜日の朝、皆が鷄卵を半分宛貰ふといふ事であつた。

古人も至誠にして動かざる者は未だ之あらざる也。と言

つて居るが、げに至誠の力ほど恐ろしき者は世にあるまい。見よ、貧しき靴屋の主人の至誠は、凝つて大英國の大宰相を造り出し、而してこの大宰相の精神は、轟て四海萬國を支配せんとする事を。

傳へ聞く、ロイド・ヂョーヂの始めて大藏大臣に任ぜられ、居をドウニング街の官邸に移すや、彼は其の衷情を吐露していふ、「余の親愛する老叔父は、その平素目して大英雄となせるグラッドストーン*が、嘗て住ひしことある斯の官宅に來つて滯留することを、必ずや一代の面目となして大いに喜ぶであらう」と。今や其のロイド・ヂョーヂが此の軍國多事の際に當つて、とう〳〵總理大臣となつたのである。私は記し來つて彼を思ひ此を思ふ時、筆を停めて落涙するを禁じ得ざる者である。

グラッドストーン　英國の大政治家にして雄辯家。(1809-1898)

私は繰返す。—現代世界の政治家中、ロイド・ヂョーヂは私の最も好きな政治家である。蓋し彼は弱者の味方である。殊に彼は、不幸なる弱者が無慈悲なる强者の爲に、非道の壓制に苦しむのを見る時は、憤然として己の面に唾せられたるが如くに赫怒する。而して此の强者を抑へ弱者を扶くるが爲には、彼は殆ど己の身命の危きを顧みざる人である。思ふに最も能く彼の人物を見るに足るものは、南阿戰爭當時に於ける彼の態度である。

苦學の結果、幸ひにして辯護士と爲り得たる彼は、後選ばれて代議士と爲る。代議士と爲りてより數年後、彼の一生にとりて一大事件と看做すべきものが起つた。それは南阿戰爭の爆發である。

南阿戰爭とは、英國がアフリカの南端なるトランスバー

軒輊……相異。

ルの金鑛を獲取せんが爲に、ブーア人を相手として起した戰爭である。ロイド・ヂョーヂ思へらく、こは資本家の貪慾を充たさんが爲に起されたる無名の師である。苟も世界最大の强國たる大英國が、ウエールズ國中の最も小なる二郡に比して敢へて軒輊なき人口を有するに過ぎざる二小國卽ちトランスバール國・オレンジ自由國に對し、武力を以て其の要求を强制せんとするは非道の甚だしきものである。大英國にとつての最大の寶は、凡ての國の弱き者、虐げられ居る者の爲に、其の希望たり楯たる特性卽ち是である。こはこの大英國の榮光中最も赫燿たる靈彩を放てる寶玉である。然るに南阿の邊境に如何に莫大の金銀を藏すればとて、大英國傳來の此の寶玉と交換せんとするが如きは、實に無道の極であると。乃ち一八九九年彼加奈陀に赴く

英國は眞もてっ義ーたる利ちき義の國ぞ！

義を見て云云　見義不爲無勇也（論語）

の途中、一たび開戰の報を耳にするや、彼は直ちに踵を囘し、馳せて倫敦に歸り、卽時に猛烈なる非戰運動を始めたのである。

國民全體が戰爭熱に浮されて居る眞只中に、それ等熱狂せる同胞を非難攻擊して、非戰運動を始むるほど世に無謀な仕事は無い。彼の友人、彼の同情者、彼の後援者は、擧つて此の無謀なる事業に反對し、彼が折角の人氣をば一朝にして失墜せんことを虞れ、是非に沈默を守らんことを切諫した。而も義を見て爲さゞるは勇なき也。而して彼ロイド・ヂョーヂは勇者である。彼は乃ち囂々たる反對・妨害・罵詈・讒謗をものともせず、非戰論を提げて全國を遊說せんと志し、先づ自己の選擧區に歸るや、有權者團體は、此の地において公開演說を開催することの、極めて不得策なるを主張し

て已まざりしに、彼は答へていふ「若し諸君にして強ひて爾か主張せらるゝならば、余は議員の職を辭するも厭はず」と。斯くてウエールズに於ける第一回の演說は、反抗心に滿てる聽衆を前にして、カーマーゼンといへる處にて催されたが、當時に於ける彼の精神は、次の一句中に活躍して居ると思ふ。彼曰く、

余の見て以て破廉恥と爲すもの（南阿戰爭）に對し、余にして若し之に抗議するが爲、この最初の機會は勿論、其の他凡ての機會を捉ふることなくして已むならば、余は神及び人の前に立つて、自ら一個不忠の卑怯漢たるの感を爲さゞるを得ぬであらう。されば余は、今夜も玆に敢へて抗議する、縱んば明日からはこのカーマーゼンに一人の友人も無くならうとも。

縱ひ凡ての同胞を悉く敵とするも、不正不義に向つては一歩も假借すべからずと云ふのが、彼の精神であつた。併しながら、彼が猛烈に運動すればする程、世間の反感も亦益〻猛烈になるばかりであつた。現に彼自身の選擧區に於ても、バンゴアといふ處にて演說會を開きし時の如きは、會館は猛り狂ふ群集に依つて絕間なく攻擊され、彼自身も市街の眞中に袋叩きに會つた。此の如くにして彼の不人望の其の極頂に達したる時、恰も一九〇〇年總選擧が行はれた。此の時ばかりは纔かに殘つた彼の後援者も殆ど失望の極に陷つたが、流石は英國だ。この國賊この賣國奴は、前回よりも五割以上の投票數を得て、重ねて再選せらるゝことゝ爲つた。

重ねて議員に再選せられてより、ロイド・ヂョーヂは勇氣

百倍、縱横無盡に其の奮鬪を續け、かくて翌一九〇一年の十二月には、彼は愈、基督降誕祭の前日を期し、南阿戰爭の直接の責任者たる植民大臣チャンバーレンの鄕里バーミンガム市に攻入る豫定を立てた。そも〳〵このバーミンガム市は、チャンバーレンの本營牙城にして、氏の政敵の曾て足一歩も踏入るゝ能はざりし處である。チャンバーレンは早くより親しく同市の市政に參畫し、幾多の改良改革を斷行し、同市をして英國都市中の模範たらしめし恩人で、數十萬の市民は氏を神の如く崇拜して居たのである。されば ロイド・ヂョーヂの此の地に入らんとするの報一たび傳はるや、同地の新聞紙は一齊に筆を揃へて獰猛に彼の攻擊を開始し、「自稱國賊來らんとす」。「賣國奴ロイド・ヂョーヂ侵入せんとす」などいふ挑發的文字を以て、盛んに市民の反感を

自ら反みて
自反而不縮、雖褐寬博吾不惴焉。自反而縮、雖千萬人吾往矣(孟十)

喚起し、廣告隊は終日市中をねり歩きて、「國王・政府及びチャンバーレン君を防衞するがため、忠實なる凡ての市民は、ロイド・ヂョーヂの演說會場たるタウン・ホール(市公會堂)に押寄すべし」。なんど觸廻るといふ勢で、彼未だ來らざるに殺氣は已に市内に漲つた。こゝに於てか警察部長は萬一を慮り、彼に向つて切に集會を中止せんことを求めたけれども、元來彼ロイド・ヂョーヂは、「自ら反みて縮からずんば褐寬博と雖も吾惴れざらんや。自ら反みて縮くんば千萬人と雖も吾往かん」といふ流儀の豪傑なれば、何條斯かることに萎縮むべき。愈、豫定の日、豫定の場處で大演說會を開くことゝなつた。そこで當日は、警察官は總出となつてタウン・ホールの界隈を警戒し、建物の内部にも亦多勢の警察官が潛伏して萬一に備へた。しかし是等の準備も遂に凡て無效

に歸した。ロイド・ヂョーヂが其の雄姿を演壇に現はすや否や、場内の聽衆は密に携へ來れる各種の飛道具をば演壇目がけて一齊に放射し、場外の群衆も亦猛り狂うて窓を破り、扉を押しのけて亂入するといふ勢に、ロイド・ヂョーヂは遂に一語をも發するを得ず、演壇の後方なる一小室に難を避け、警官の制服制帽に着替へて纔かに會場を拔けいで、辛くも一命を拾うたのであつた。此の時人民の重傷を負へる者二十七名、卽死一名、警官にして重傷を蒙りたる者亦少からざりきと云へば、以て其の騷動の如何に甚だしかりしかを知り得ると同時に、平生冷靜沈着なる英人が斯程までの騷動を惹起せしことは、其の激昂の度の如何に甚だしかりしかを知るに足ると思ふ。

エヴンスは彼を評して、「ロイド・ヂョーヂ以上の militant peace maker（戰鬪的平和主唱者）は曾て見たことがない。彼は南阿戰爭當時において、ボーア人が英軍に反抗して戰ひしと同じ激しさを以て、戰爭に反抗して戰つた。」と言つて居るが、實に其の通りだと思ふ。

叔父のリチャード・ロイドは、其の甥を理想的に育て上げることを、神聖且最高の義務と信じて、之に其の一身を獻げた。是故に此の叔父に依つて育てられたるロイド・ヂョーヂは、其の神聖且最高の義務と信ずる所に向つて、常に其の一身を獻げつゝある。

四歲にして父を喪ひ、二人の孤が母を擁して相泣きし時、身を獻げて彼等の急を救うた者は叔父のリチャード・ロイドであつた。叔父はこれが爲に一生娶らず、彼等と共に具さに辛酸を嘗盡くした。其の恩義、其の慈愛は、ロイド・ヂョ

ーヂの五臟六腑に泌亙つて居る。彼が弱き者の虐げらるゝを見るときは、必ず常に、人あり孺子を捉へて井中に投ぜんとするを目擊するが如きの感を爲すも、畢竟之が爲である。

彼は之が爲に、嘗て南阿戰爭に當つては其の同胞を敵として戰ひ、敢へて身命の危きを顧みず。後擧げられて大藏大臣となるや、幾多の反對攻擊をものともせず、着々として多數貧民の爲に樣々の社會政策を實施した。「世界に政治家は多い。さうして彼等は世の認めて以て尊貴と爲し名譽と爲す所のものを得、富も亦彼等の上に積まれつゝある。乍併、多くの人々が自分の居間に獨坐する時、密に彼の利益の爲に祈り、自分自身さへ十分に享受して居ない幸福をば、只彼が上に在れかしとのみ念じつゝあるが如き、隱れたる夥しき同情者を有すること、ロイド・ヂョーヂの如く多きものは未だ曾て無い。」と言はるゝも、之が爲である。

彼は又これが爲に、今や獨逸人の暴虐を懲罰せんが爲、獅子奮迅の勢を以て軍國の大事に當りつゝある。開戰後間もなく軍需大臣となり、次いで陸軍大臣に轉じ、遂に今は總理大臣の椅子を占め、隱然として聯合軍諸國の總大將たるの觀がある。而も余を以て之を見れば、彼は依然として、今より約十五年前、英國バーミンガム市において其の同胞の爲に殆ど一命を奪はれんとせし當年の militant peace maker 卽ちロイド・ヂョーヂそのまゝの人である。思ふに軈て來るべき平和會議の席上において、最も權威ある發言を爲し得る者は、必ずや彼ロイド・ヂョーヂであらう。而も彼は正義の爲に、能く獨逸人と戰ふことを知ると同時に、又能く自

國人と爭ふことを知る。この故に私は、來るべき平和會議の席上に、心より彼を歡迎すると同時に、戰後の經營に於ても、英國多數の貧民の爲、彼の生命の永へに長からん事を祈る。國家を異にし人種を異にしながら、私の密に其の長壽を祈りつゝあるは、世界の政治家中たゞロイド・ヂョーヂ一人である。(河上肇稿、東京朝日新聞所載)

河上肇
法學博士、經濟學者、京都帝國大學教授。

二　家康と老子道德經

もし我が國三千年間に於て、最も偉大なる經世的政治家を選擧するとしたならば、何人が最高點を占むるであらう。藤原鎌足か、源頼朝か、足利尊氏か、はた豐臣秀吉か。此等の人々は、いづれも我が民族の精粹を鍾めた秀偉の產であり、且また歷史上に、それ〴〵新時期を開き出した絕大な功業

者であるから、それ〴〵相應の投票を得るに相違ないが、其の中でも最高點を以て當選するものは、必ず德川家康其の人でなければならぬ。彼が戰國最終の時局收拾者として、將近世二百餘年間に於ける太平と文明との建設者として、發揮したる所の政治的手腕は、實に靈妙を極めたもので、獨り我が國に於て四儔を絕するのみならず、これを世界に求むるも、餘り多くの類型を看出すことが出來まい。

家康は、我が國の最も偉大なる經世的政治家たると同時に、また最も偉大なる英雄漢である。世人は、英雄といへば、直ちに秀吉を聯想し、秀吉を措いて他に之と匹敵すべき英雄漢なきが如く速斷するけれども、家康も亦決して秀吉に下るものではない。但し秀吉は天才的である。本能のまに〴〵遠慮會釋もなく發動して、宛ら天馬の羈束すべから

ざるが如く、奔放豪宕、派手に陽氣めきて、人意を快うするけれども、家康は常識的である。意志を主として、思慮鍛錬に拔目なく、沈着精到苟にも浮華衒耀の態がないから、地味過ぎて陰氣臭い。併し優劣は素よりこゝに在らず。秀吉を學んで到らざれば、虎を描いて猫に類するを免れまいが、家康を學んで到らざれば、鵠を刻んで猶鶩に類することが出來ようから、英雄漢の模範としては、秀吉よりも寧ろ家康に就くのが適當である。

さて然らば、此の偉大なる英雄漢は、何によりて其の心術人格を鍛錬したか、何によりて其の宏遠靈妙なる政治的手腕を修養したか。駿河土産にいふ、

駿河土産　大道寺重祐著、家康の言行遺跡に關することを記せり。

御隱退　慶長十年四月

御隱退の前かた、江戸より本多佐渡守正信、事によりて駿府へ罷りしとき、正信に仰せられしは、「われ若年の時は、軍務繁多にして、學問する暇なし。よりて生涯不學にして、今この老齢に及べり。さりながら老子がいひし詞なりとて、人に聞置きしは、『足る事を知りて足るものは、常に足る。』といふ語と『仇に報ずるに德を以てす。』といふ二語は、若き程より常に心にとめて受用せしなり。將軍には我と違ひ、かね〳〵學問をせられし事なれば、定めて聖賢の格言ども數多心得てあるべければ、此の語のみを用ひられよといふにはあらざれども、汝等が心得までに言ひおくなり。」と宣へば、正信感銘して江戸に還り、其の由申上げしかば、將軍家直ちに御硯を召して、右の二語を記し給ひ、御座右に糊して置きしが、其の後、金地院崇傳に命じ、此の語を大書せしめて、燕室に掛けおかれしとぞ。

將軍職を秀忠に讓りて駿府城に隱居す。本多佐渡守　家康の寵臣、三河の人。老子　支那周代の學者、道家の祖。金地院崇傳　江戸金地院の開山、將軍家に仕へて筆札を司る。

其の半生受用して盡きず、更に擧げて子孫に遺した所の

教訓が、儒學でも佛教でもなく、老子の言であつたことは、注意すべき事實である。老子の書は果して家康の如き英雄漢を作るの力があるであらうか。

老子の教は、虛無を體とし、陰柔を用とし、仁義禮法の桎梏より脱離して、無爲自然の簡樸に復歸すべく、强に對して弱を執り、雄に對して雌を守り、動に對して靜を持し、極めて消極的なる工夫を主とするものゝ如く、一般に認められて居るけれども、是は其の皮相のみを見て骨髓に徹せざるもので、老子の虛無を說くは虛無を目的とするにあらず、實有を制せんが爲に虛無を說くのである。陰柔を敎ふるは陰柔を歸結とするにあらず、陽剛を服せんが爲に陰柔を敎ふるのである。故に其の言にいはく、「將に之を歙めんと欲せば必ずこれを張れ。將に之を弱めんと欲せば必ずこれを强

うせよ。將に之を廢せんと欲せば必ず之を興せ。將に之を奪はんと欲せば必ず之を與へよ。」と。以て其の大機略、大作用の存する所を窺ふべく、此の筆法より推せば、彼の弱を執れといふは强に勝たんが爲である。雌を守れといふは雄を壓せんが爲である。靜を持せよといふは動を制せんが爲である。「天下の柔弱は水に過ぐるなし。而して堅强を攻むるもの、之によく勝つことなし」で、彼の柔弱を體するは、實に堅强に勝たんが爲の活策略である。されば老子の敎は、天下の至柔なるものであると同時に、また天下の至剛なるものである。綿裡に針を裹むと古人も評せしごとく、虛靜柔弱の皮毛裡に、活動剛健の筋血を藏すといふのであるから、柔一味で往かず、剛一邊で往かず、柔にして剛、江河の水の如し。剛にして柔、百錬の精金の如し。巧く猫を被

つて行く呼吸がなか〳〵六かしい。この呼吸を自得して、老子の旨に契うたものは古今張子房一人のみと、支那の學者は評して居る。子房が秦皇を博浪沙に椎擊するの剛氣を歛めて、漢高の帷幕に隱れ、縱横の奇策ぬかりなく、天下已に定まるや、狡兎死して良狗煮らるゝの機を察して、飜然赤松子に從つて遊んだのは、如何にも老子の玄機に觸れた所がある。然し子房は猶未だ言ふに足らず。老子の大機略、大作用を領得して、無碍自在の妙域に透入したるものは、獨り我が家康に於てこれを見ることが出來る。彼は將軍秀忠の對症劑として、「足ることを知りて足る者は常に足る。怨に報ずるに德を以てす。」の二語を擧げたけれども、彼自身の受用した所は決して此の二語に止まらず。老子の玄旨を擧げて、神會殘す所なく、殆ど道德經五千言の文字が結晶

張子房　張良をいふ。子房は良の字。西漢時代の謀士。初め韓に相たりし故を以て秦皇を椎擊す。中らず。

秦皇　秦の始皇帝、韓を始めとして趙・楚・魏・燕・齊を滅ぼし始めて天下を一統す。

博浪沙　河南陽武縣にあり。

赤松子　支那にて稱す仙人の名。

して、家康といへる一個の英雄漢を化現したかと思はるゝ程である。

老子の書は、徹頭徹尾世に處し人に接する大機略、大作用を說示したもので、「我に三寶あり、持して之を寶とす。一に曰く慈。二に曰く儉。三に曰く敢へて天下の先とならず。慈なるが故に能く勇あり。儉なるが故に能く廣し。敢へて天下の先とならざるが故に能く器の長となる。」といへる語は、最もよく老子の政事思想を語つて居る。而してまた家康の言行は、往くとして老子の玄旨に契合せざるはないが、最もよく此の語を體現して居る。

言ふまでもなく、亂れに亂れた戰國の社會は、織田信長これを始めに斬伐し、秀吉これを中ごろに蕩平し、家康に至りて統一の局を收め、最後の覇業を確立したのであるが、信長

は威ありて恩なく、秀吉は恩ありて德なし。恩德並び行はれて、人心を固め、老子の謂はゆる慈なるが故に能く勇なるの境涯に入つた者は、家康その人を推さねばならぬ。蓋し信長が、攻むる者は必ず之を滅し、降る者は必ず之を殺し、專ら殘刻を以て威を立てたのは、群雄土着の積弊を打破する政策上の必要より、已むを得ざるに出でたとはいふものゝ、亦其の人の嚴厲忍酷なるに出でたのであるが、しかし秀吉の施與を以て恩を賣り、濫賞侈封至らざる所なかつたのも、市井の遊蕩兒が金錢を湯水の如く使ふのと等しく、徒に人目を驚かすだけで、其の誠心を感孚せしむるに至らなかつたのである。其處へゆくと、家康は偉いもので、第一に譜代の制を設けて、立國の根柢を固めた。德川家で譜代といふは、參・駿・甲以來隨從の家臣を稱するので、主從の關係を親密

にし、忠節律義の士風を奬勵するに力めた。秀吉嘗て大阪の千貫櫓に於て德川勢の馬揃を閲した事がある。何れも今日を晴れと扮裝つた中に、一際目立つ黑馬紅韁の壯士。秀吉早くも目を付け、家康を顧みて何者ぞと問ふ。これは成瀨小吉といふ者なりと答ふれば、知行何程取らするかとの再問に、千石遣はし置く旨答へる。秀吉聞きて、彼は欲しき武者振なり。我ならば五萬石取らせんものをとて、小吉を所望せり。家康その趣を傳へた所が、小吉情なき事を仰せらるゝものかな、年頃心を碎きて御爲には一命を奉らんと思ひ込み居るに、今他家へ遣はされんとならば、腹切るより外なしと、如何にも決心の體にて涙をはら〳〵と流す。家康重ねて、其の方豐臣家の招きに應ぜば、五萬石の大身となり、且、當家の爲にも便りよし。枉げて得心せよと諭した

けれども、頑として聽入れず。家康詮方なく、有りの儘に復命した。秀吉聞きて、彼が樣子にてはさもあらん。○徳川殿には善き家來數多持たれ、羨ましき事なり。隨分大切に召使はれよといふ。家康歸館の後、小吉を召寄せ、新參の者ならば、さまで厚き心立はあるまじきに、年頃仕へし者ほどあつて、他家の富貴を望まず。眞心に我に從ふこと、去りとは神妙の至りであると稱美した。譜代武士の氣風は、概ね此の如きもので、なか〳〵義が固い。大久保彦左衞門は曰ふ、「御譜代衆は、相國樣の御代まで山野に伏して、夜晝稼ぎ廻りをして、武邊を家として、槍先を磨き、鐵砲を磨き、武邊を胸に絶やさずして、此の道を稼ぎたる者の子孫に候へば、祖父・親の武骨なる姿を、生立より見つけ候へば、上方衆の樣にいたいけらしき聲遣ひをして、小雛のやうにいで立ちて、輕薄を

相國樣　秀忠の事。相國は太政大臣の唐名なり。秀忠太政大臣たり、故に相國樣といふ。

いふ事は罷り成るまじけれども、併しながら恐らく御用に立ち申す事に於ては、御譜代衆の上越すものは、恐れながら日本にはあるまじ。御譜代衆を集め置かせ給ふならば、日本國中の者打かゝるとも、百萬人で寄來るとも、御譜代衆一萬騎あるべきか、上樣の御先にて、鍬を傾けてかゝるならば、何かはためんや」。

斯の如き忠烈律義なる譜代氣質を養成したのは、全く家康平素の撫育宜しきを得た爲で、「慈なるが故に能く勇なり」。との活證を與へるものである。

併しながら、家康の恩慈を施したのは、單に譜代のみに止まらない。武田氏の滅ぶるや、其の遺臣の信長に迫害せらるゝを庇護して、己が囊中の物となし、北條氏の滅ぶるや、また其の遺臣を搜し出して、これを收用し、伊達政宗の如き、淺

野長政の如き、細川忠興の如き、小早川秀秋の如き、秀吉の嫌疑に觸れて危難の厄境に陷りしものは、家康いづれも之を救解保護して、無事なるを得しめた。　他日、關ヶ原天下分目の戰役に於て、目ざましき大捷を博して、覇業を定むることを得たのは、實に此等諸客將の働きに由つたのであるが、家康の平素、この恩慈を賣るに意を用ゐることは、實に周到遺憾なく、今川氏眞の國を失ふや、これを待つに賓客の禮を以てして、安處の地を得しめ、また織田信雄の秀吉に壓迫せらるゝや、信雄を擁して、秀吉の雄鋒を挫かんと試みた。　其の果して氏眞の爲にし、信雄の爲にする誠心ありしや否やは、疑問であるけれども、兎に角、義元や信長の舊誼を懷うて、其の遺子を保護することになるので、これが爲に慈名を賣つたことは尠少でない。　其の秀吉と和を講じて上洛せんとするに當り、家臣等これを遮り止めて開戰論を主張するや、彼は、「應仁以來大亂打續き、人民一日として安きことを得ず。今天下やうやく靜謐ならんとするに及んで、余また秀吉と干戈を交へば、騷亂いよ〳〵　止む時なくして、人民これが爲に命を喪ふ者多からん。　豈傷ましからずや。　されば余が一命もて天下萬民の命に代り、上洛せんと思ふなり。」と揚言し、四圍の形勢自ら上洛して、秀吉の軍門に伺候するの外、他の奇策なきの境遇にありながらも、猶且天下萬民の爲にするとの仁聲を鳴らして、將士の意氣を鼓舞し、暫く屈するも、再び伸ぶるの地歩を占めたるは、「慈なる故に能く勇なり。」の大機略を、十二分に體得したものである。

家康はまた、「儉なるが故に能く廣し。」の一寶を得て居た。由來、英雄の時勢を操り、人心を收むるには、二樣の方式があ

君子は其の志を尊みて
小人は其の事を尊ぶ

る。一つは財寶封祿を視ること土芥と等しく、惜氣もなく之を揮霍(キカク)して、富貴榮達の餌に人氣を釣込む仕方で、秀吉はこれが魁首と稱すべく、其の薫陶を受けた蒲生氏郷の若きは「武士は利錢利潤(ジュン)をば心にかけ給ふべからず、當年の知行物成、來年の六七月に遣ひ拂ひ候へば、其の秋は一萬石の知行出來候。年々に絶えぬものにて候」と曰ひ、石田三成の若きも亦「奉公人は主君より取るものを遣ひ合はせて殘すべからず、殘すは盗人なり。遣ひ過して借錢するは愚人なり」。といひ、遺憾なく秀吉式を發揮して居る。又一つは、老子の謂はゆる天下を治むるは、嗇に如くは莫しの主義を執り、土地財寶を愛重して、施與を濫りにせず。錙を積み斤を重ねて、儉約を守るもので、家康は卽ち此の派の巨魁である。何にせよ、堂々たる覇者の身を以てして、犢鼻褌(コンドン)は、白よりも淺

黄地を用ゐる方が、汚れ目が見えなくてよしとて、必ず淺黄地の晒布を用ゐ、大奥の女中共に古足袋を洗濯させ、痛く破れたものと、汚れの薄いものとを選りわけて、二つの箱に收め置かせたといふほどの儉約家。蒲生氏郷をして、家康は吝嗇なるが故に、天下取りになれぬと評せしめたが、焉んぞ知らん、此の吝嗇漢こそ「儉なるが故に能く廣し」の玄旨を自得せんとは。

家康が幕府の礎固く、二百餘年の太平を築き上げたのは、全く「儉なるが故に能く廣し」の意を得たものであるまいか。若しそれ「敢へて天下の先とならざる故に器の長となる」の一寶に至つては、家康囊中の如意珠である。且看よ、彼が天下を得るまでの徑路が如何に迂餘遲緩なりしかを。其の信長と聯盟するに際しては、何處までも信長を押立てゝ、己

甘んじて其の下風に就き、武田信玄の如き勁敵に當つて、死ぬるか生きるかの辛き目に遭へども、一向悔恨する氣色なく、しかも其の間に、大勢己に不可なるを知りつゝも、絶えて窘迫の態を示さず。一旦秀吉の來りて釣込み策を施すに及びては、釣込まるゝと知りつゝも、故意と知らぬ顏して、其の手に乘りしかの如くに看せかけ、「秀吉は、己が才略を以て一世を籠絡せんとする人なれば、余また之に對して、智謀ある人と見られんは反りて惡しきなり。兎角物事に心づかず、篤實一ぺんの人と思はれんこそよけれ。」とて、樸質の風を裝ひ、奉事甚だ謹み、秀吉の瞑目するに及んで、徐ろに其の鋒鋩を露はし始めた。これ極めて老子陰柔の旨を得たるもので、我より進んで事を仕掛くることなく、情勢の上より、敵手をして餘儀なく來り迫らしめて、己は止むを得ず起つて

鷦鷯云々
鷦鷯巢二於深林一不レ過二一枝一（莊子）
其の分に安んずべきに喩ふ。鷦鷯はミソサザイをいふ。

偃鼠云々
偃鼠飲レ河不レ過二滿腹一（莊子）
同じく分に安んずべきに喩ふ。偃鼠はドブネズミをいふ。

之に應ずるものゝ如くにし、徐ろに最後の全勝を制するが得意の手段である。大阪に對する擒縱策の如き、殊に其の巧妙を見るべく、石田・上杉・片桐より加藤・福島・淺野の諸豪に至るまで、皆その掌中に翻弄せられて、自ら悟らなかつたのである。

家康が老子の所謂三寶を得て、護國持身の靈符としたること、己に此の如くなれば、卽ち其の虛無陰柔の要妙を神會自得したこと、推して知るべきである。

さて然らば、老子の「足る事を知つて足る者は、常に足る。」といへる語は、如何なる意義を有したか。また家康が、殊に此の語を愛用したといふは、如何なる點にあるか。

「鷦鷯（ミソサザイ）は深林に巢くへども一枝に過ぎず。」「偃鼠は河に飲めども滿腹に過ぎず。」足るを知るといへば、如何にも無爲

小成の陋態に安んじて、活動進取の氣力なき者の如く聞えるけれども、老子の眞意は、決して足るが爲に足るを知るのではない。大不足を滿たさんが爲に足るを知るといふのである。家康が嘗て、「余三河一國に主たる時は、三河一國の備へを堅め、關八州に主たる時は、關八州の治め方を整へ、天下に主たるときは、天下を治むるの法を立て、妄りに其の分を踰えて、非望がましき事を企てたることなし。」といつたのは、其の好註脚に充つべく、詰り其の時々の境遇に應じて、安心の地歩を占め、欲めんと欲すれば必ず之を張り、弱めんと欲すれば必ず之を強くするの工夫を以て、辛抱づよく、根氣よく、虚靜陰柔の妙諦を守れとの意味である。老子の書あつて以來、この微妙の機略を透破し得たるものは、唯家康一人のみと謂つてよい。

秀吉の伽の者に、曾呂利伴内といへる滑稽者あり。或とき、家康に向ひ、世人の福の神として敬ひ祭る大黑天のいはれを御傳授申さんとて、「まづ人間は、食物が無ければ一日も生存する事が出來ぬ。それで大黑天は、食物の親と仰ぐ米俵を踏んまへて居られる。しかし、食物ばかりあつても、錢財がなければ用辨足らず。それで又大黑天は、金銀入れた大袋を持つて、左手に其の口を括り、無用の事には一錢も費すまいと構へて居られる。されど愈錢財を使はねばならぬ時には、右手に持つたる小槌を以て大地を叩けば、いくらでも惜氣なく打出される。また夏冬通して、頭巾眉深に被つて居られるのは、己の身分を忘れて、假りにも上を見まいとの用心。人間も其の心掛さへすれば、長く福祿を保つことが出來るといふ心で、大黑天をば福の神と申すので御座

る。」といへば、家康打頷きて、「貴樣の言ふ所は至極尤もだが、まだ大黑天の極意をば知らぬと見える。成程大黑天は、夏冬通して頭巾を被づて居られるけれども、此處が頭巾を脫がねば叶はぬ時分ぞと思へば、忽ち頭巾を投棄てゝ、上下四方に眼を配り、毛程の拔目もなくする爲、不斷には被りつめて居られるぞ。これが大黑天の極意よ。」と說示されたので、さすがの伴內も痛く感心し、秀吉に此の由を話すと、「今の世にも生大黑がある。それを貴樣は知つて居るか。」とのことに、伴內存ぜざるよし答ふれば、秀吉笑つて、「生大黑とは家康のことよ。」といつたとあるが、如何さま家康ほど大黑天の極意を得たものは、古今絕無なるべく、常に「上を見な。」「身の程を知れ。」の二語を、五字訣、七字訣と稱して、護身の符に充て、六十餘の白髮頭になるまで、大黑頭巾を被り通し、關ヶ原合戰に、徐

大慾は云々　徒然草に出でたる語。

徐紐を解きはじめ、大阪攻に至つて、瓦破と頭巾を投棄て、全頭を露出したのであるが、小皺の寄つた膨ら顏の好老爺と思ひの外に、獰猛の眼光凄じく、たゞ一ひしぎに豐臣家を挫ぎ倒して、天下を手に入れた。老子の足るを知るといふは、此の大黑頭巾を投げすてるまでの豫備的行動と見ればよい。「*大慾は無慾に似たり」。無慾に似たるは卽ち大慾なる所以である。

「德を以て怨に報いよ」といふも、老子が人情の裏を搔く陰柔作用の一つで、家康の言行中に例證を見出すことは、さまで困難でないが、然し斯かる穿鑿をするよりも、東照宮遺訓と稱するものを見る方が捷徑だ。

人の一生は、重荷を負うて遠き道を行くが如し、いそぐべからず。不自由を常と思へば、不足なし。心に望み起ら

ば、困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ。勝つ事ばかり知りて、負くる事を知らざれば、害その身に至る。己を責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるよりまされり。

寥々數十言の文字、さながら老子道德經五千言をランビキにかけて、其の精粹を搾り取つたかと思はるゝばかり。偉大なる英雄と偉大なる哲人とは、千古を距てゝ心機自ら冥契して居る。（長田偶得著―「狸爺家康」に據る。）

三　倫敦塔

二年の留學中只一度倫敦塔を見物した事がある。其の後再び行かうと思つた日もあるが止めにした。人から誘はれた事もあるが斷つた。一度で得た記憶を二度目に打

倫敦塔　初め國王の居城なりしが、後には國事犯人の牢獄となり、現時武庫及び古遺物の陳列場に充てらる。

マクスノルダウ　獨逸の批評家。（1849―）

壞すのは惜しい。三たび目に拭ひ去るのは最も殘念だ。塔の見物は一度に限ると思ふ。

行つたのは着後間もないうちの事である。其の頃は方角もよく分らんし、地理抔は固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の眞中へ抛り出された樣な心持であつた。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に歸れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。此の響き、此の群集の中に二年住んで居たら、吾が神經の纖維も、遂には鍋の中の布海苔の如くべと〳〵になるだらうと、マクス・ノルダウの退化論を、今更の如く大眞理と思ふ折さへあつた。

塔を見物しただけは慥であるが、余はどの路を通つて塔に着いたか、また如何なる町を横ぎつて吾が家に歸つたか、

未だに判然しない。どう考へても思ひ出せぬ。塔其の物の光景は、今でもあり〳〵と眼に浮べる事が出來る。前はと問はれると困る。後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が、會釋もなく明るい。恰も闇を裂く稲妻の眉に落ちると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焦點の樣だ。

倫敦塔の歷史は英國の歷史を煎じ詰めたものである。過去と云ふ怪しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて、龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時の流れが逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して、馬・車・汽車の中に取殘されるのは倫敦塔である。

此の倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てゝ眼の前に望んだとき、余は今の人か將古への人かと思ふ迄我を忘れて、餘念もなく眺め入つた。冬の初めといひながら、物靜かな日である。空は灰汁桶を搔交ぜた樣な色をして、低く塔の上に垂懸つて居る。壁土を溶かし込んだ樣に見ゆるテームスの流れは、波も立てず音もせず、無理矢理に動いて居るかと思はれる。帆掛船が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから、不規則な三角形の白き翼が、いつ迄も同じ處に停まつて居る樣である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。只一人の船頭が艫に立つて艪を漕ぐ。是も殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには、白き影がちらく〳〵する。大方鷗であらう。見渡した所、凡ての物が靜かである。物憂げに見える。眠つて居る。皆過去の感じ

である。さうして其の中に冷然と二十世紀を輕蔑する樣に立つて居るのが倫敦塔である。汽車も走れ。電車も走れ。苟も歴史の有らん限りは、我のみは斯くてあるべしと云はぬ許りに立つて居る。其の偉大なるには今更の樣に驚かされた。此の建築を俗に塔と稱へて居るが、塔と云ふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの、角張りたるもの、色々の形狀はあるが、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べて、さうして其を虫眼鏡で覗いたら、或は此の塔に似たものが出來上りはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和したる空氣の中に、ぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦がわが

心の裏から次第に消去ると同時に、眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を、吾が腦裏に描き出して來る。暫くすると、向う岸から長い手を出して、余を引張るかと怪しまれて來た。今迄佇立して身動きもしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門迄驅けつけた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮游する此の小鐵屑を吸收して了つた。門を入つて振返つたとき、

憂の國に行かんとするものは此の門を潜れ。
永劫の苛責に遭はんとするものは此の門をくゞれ。
迷惑の人と伍せんとするものは此の門をくゞれ。

憂の國云々　ダンテの神曲インフェルノの第三編にあり。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初の愛は、われを作る。

我が前に物なし、只無窮あり。我は無窮に忍ぶものなり。

此の門を過ぎんとする者は一切の望みを捨てよ。

といふ句が、どこぞに刻んではないかと思つた。余は此の時既に常態を失つて居る。

空濠にかけてある石橋を渡つて行くと、向ふに一つの塔がある。是は丸形の石造で、石油タンクの狀をなして、恰も巨人の門柱の如く、左右に屹立して居る。其の中間を連ねて居る建物の下を潛つて向うへ抜ける。中塔とは此の事である。少し行くと、左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の楯、黑鐵の甲が野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて、敵遠くより寄すると

知れば、塔上の鐘を鳴らす。星黑き夜、壁上を步む哨兵の隙を見て逃れ出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆるときも、塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民が、君の政非なりとて、蟻の如く塔下に押寄せて犇めき騷ぐときも、亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす、祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は、今いづこへ行つたものやら。余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げたときは、寂然として既に百年の響を收めて居る。

又少し行くと、右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が聳えて居る。逆賊門とは名前からが既に恐ろしい。古來から塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は、皆舟

から此の門迄護送されたのである。彼等が舟を捨てゝ一たび此の門を通過するや否や、娑婆の太陽は再び彼等を照らさなかつた。テームスは彼等にとつての三途の川で、此の門は冥府に通ずる入口であつた。彼等は涙の涙に搖られて、此の洞窟の如く薄暗きアーチの下迄漕付けられる。口を開けて鰯を吸ふ鯨の待構へて居る所まで來るや否や、きーと軋る音と共に、厚樫の扉は彼等と浮世の光とを長へに隔てる。彼等はかくして遂に宿命の鬼の餌食となる。明日食はれるか、明後日食はれるか、或は又十年の後に食はれるか、鬼より外に知るものはない。此の門に横付につく舟の中に坐して居る罪人の途中の心は、どんなであつたらう。櫂がしわる時、雫が舟縁に滴たる時、漕ぐ人の手の動く時毎に、吾が命を刻まるゝ樣に思つたであらう。白き髯を

クランマー (1489－1556)
ワイアット (1520－1554)

胸迄垂れて、寬かに黑の法衣をまとへる人が、よろめきながら舟から上る。これは大僧正*クランマーである。青き頭巾を眉深に被り、空色の絹の鎖帷子をつけた立派な男は*ワイアットであらう。これは會釋もなく舷から飛上る。はなやかな鳥の毛を帽に挿して、黃金作りの太刀の柄に左の手を懸け、銀の留金にて飾れる靴の爪先を、輕げに石段の上に移すのは*ローリーか。余は暗きアーチの下を覗いて、向側には石段を洗ふ波の光の見えはせぬかと首を延ばした。水はない。逆賊門とテームス河とは、堤防工事の竣功以來全く緣がなくなつた。幾多の罪人を呑み、幾多の護送船を吐出した逆賊門は、昔の名殘に其の裾を洗ふ笹波の音を聞く便りを失つた。たゞ向側に存する血塔の壁上に大なる鐵環が下つて居るのみだ。昔は舟の纜を此の環に繫いだ

ローリー (1552－1618)

といふ。

左へ折れて血塔の門に入る。今は昔*薔薇の亂に、目に餘る多くの人を幽閉したのは此の塔である。草の如く人を薙ぎ、鷄の如く人を潰し、乾鮭の如く屍を積んだのは此の塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番の樣な箱があつて、其の側に甲形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立つて居る。頗る眞面目な顏をして居るが、早く當番を濟まして遊びたいといふ人相である。塔の壁は不規則な石を疊み上げて厚く造つてあるから、表面は決して滑かではない。處々に蔦がからんで居る。高い處に窓が見える。鐵の格子がはまつてゐる樣だ。格子を洩れて、古代の色硝子にかすかな日影がさし込んで、きら〳〵反射する。やがて烟の如き幕が開いて、空想の舞臺がありと見える。窓の內側は厚き戸帳が垂れて、晝もほの暗い。窓に對する壁は漆喰も塗らぬ丸裸の石で、隣の室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切が設けられて居る。只其の眞中の六疊許りの場所は、冴えぬ色のタペストリ*で蔽はれて居る。地は納戸色、模樣は薄き黃で、裸體の女神の像の周圍に、一面に染拔いた唐草である。石壁の橫には、大きな寢臺が橫たはる。厚樫の心も透れと深くきざみつけた葡萄と葡萄の蔓と葡萄の葉とが、手足の觸るゝ場所だけ光を射返す。此の寢臺の端に二人の小兒が見えて來た。一人は十三四、一人は十歲位と思はれる。幼き方は床に腰をかけて、寢臺の柱に半ば身を倚たせ、力なき兩足をぶらりと下げて居る。右の肱を傾けたる顏と共に前に出して、年嵩なる人の肩に懸ける。年上なるは幼き人の膝の上に金

薔薇の亂　紅薔薇を以て記標とせるランカスター家と、白薔薇を以て記標とせるヨーク家との爭にして、西紀一四五五年より一四八五年迄繼續せり。

タペストリ　tapestry（掛氈）

にて飾れる大きな書物を廣げて、其のあけてある頁の上に右の手を置く。象牙を揉んで柔かにしたる如く美しい手である。二人とも烏の翼を欺く程の黑き上衣を着て居るが、色が極めて白いので一段と目立つ。髪の色、偖は眉根・鼻付から衣裝の末に至る迄、兩人共殆ど同じ樣に見えるのは兄弟だからであらう。

兄が、優しく淸らかな聲で、膝の上なる書物を讀む。

「我が眼の前に我が死ぬべき折の樣を想ひ見る人こそ幸あれ。日毎夜毎に死なんと願へ。やがては神の前に行くなる吾の、何を恐るゝ。……」

弟は世に憐なる聲にて「アーメン」と云ふ。折から遠くより吹く木枯しの高き塔を撼かして、一度は壁も落つるばかりにごうと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に首をす

り付ける。雪の如く白い蒲團の一部がほかと膨れ返る。兄は又讀初める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思へ。夜ならば翌日ありと賴むな。覺悟をこそ尊べ。見苦しき死樣ぞ耻の極みなる。……」

弟又「アーメン」と云ふ。其の聲は顫へて居る。兄は靜かに書をふせて、かの小さき窓の方へ歩みよりて、外を見ようとする。窓が高くて脊が足りぬ。床几を持つて來て、其の上につまだつ。百里をつゝむ黑霧の奥に、ぼんやりと冬の日が寫る。屠れる犬の生血にて染拔いたやうである。兄は「今日も亦斯うして暮れるのか」と弟を顧みる。弟は只、「寒い」と答へる。「命さへ助けて吳るゝなら、伯父樣に王の位を進ぜるものを」と兄が獨り言の樣につぶやく。弟は母樣に

逢ひたい。」とのみ云ふ。此の時向ふに掛つて居るタペストリに織出してある女神の像が、風もないのに二三度ふわり〳〵と動く。

忽然舞臺が廻る。見ると、塔門の前に一人の女が黑い喪服を着て、悄然として立つて居る。面影は靑白く窶れては居るが、どことなく品格のよい氣品の高い婦人である。やがて錠のきしる音がして、ぎいと扉が開くと、內から一人の男が出て來て、恭しく婦人の前に禮をする。

「逢ふ事を許されてか。」と女が問ふ。

「否。」と氣の毒さうに男が答へる。「逢はせまつらんと思へど、公の掟なれば是非なしと諦め給へ。私の情賣るは安き間の事にてあれど。」と急に口を緘みてあたりを見渡す。濠の內からかいつぶりがひよいと浮上る。

女は頸に懸けたる金の鎖を解いて男に與へて、「只束の間を垣間見んとの願ひなり。女人の賴み引受けぬ君はつれなし。」と云ふ。

男は鎖を指の先に卷きつけて思案の體である。かいつぶりはふいと沈む。やゝありていふ、「牢守は牢の掟を破りがたし。御子等は變る事なく、すこやかに月日を過させ給ふ。心安く覺して歸り給へ。」と金の鎖を押戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかりは敷石の上に落ちて鏘然と鳴る。

「如何にしても逢ふ事は叶はずや。」と女が尋ねる。

「御氣の毒なれど。」と牢守がいひ放つ。

「黑き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人。」と云ひながら女はさめ〳〵と泣く。舞臺又變る。

丈の高い黑裝束の影が一つ、中庭の隅にあらはれる。苔

寒き石壁の中から、すうと拔出たやうに思はれた。夜と霧との境に立つて、朦朧とあたりを見廻す。暫くすると同じ黑裝束の影が、又一つ陰の底から湧いて出る。櫓の角に高くかゝる星影を仰いで、「日は暮れた」と脊の高いのが云ふ。「晝の世界に顏は出せぬ」と一人が答へる。人殺しも多くしたが、今日程寢覺めの惡い事は又とあるまい」と高き影が低い方を向く。「タベストリの裏で二人の話を立聞きしたときは、いつその事止めて歸らうかと思うた」と低いのが正直に云ふ。「絞める時、花の樣な脣がびり〳〵と顫うた」透通るやうな額に紫色の筋が出た」あの唸つた聲がまだ耳に付いて居る」。黑い影が再び黑い夜の中に吸込まれる時、櫓の上で時計の音ががあんと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像の如く立つて居た

番兵は、銃を肩にして、ことり〳〵と敷石の上を歩いて居る。あるき乍ら想像の中に浮世の樂しみを夢みて居る。

白塔を出てボーシャン塔に行く。途中に仕置場の跡がある。二年も、三年も、長いのは十年も、日の通はぬ地下の暗室に押込められたものが、或日突然地上に引出さるゝかと思ふと、地下よりも猶恐ろしき此の場所へ只据ゑらるゝのであつた。久しぶりに青天を見て、やれ嬉しやと思ふ間もなく、目がくらんで物の色さへ定かには眸中に寫らぬ先に、白き斧の刃がひらりと三尺の空を切る。流れる血は生きて居るうちから既につめたかつたであらう。鴉が一疋下りて居る。翼をすくめて、黑い嘴をとがらせて人を見る。百年碧血の恨が凝つて化鳥の姿となつて、長く此の不吉な地を守る樣な心地がする。吹く風に楡の木がざわ〳〵と

動く。見ると枝の上にも鴉が居る。暫くすると、又一羽飛んでくる。何處から來たか分らぬ。傍に七つ許りの男の子を連れた若い女が立つて、鴉を眺めて居る。子供は女を見上げて、「鴉が鴉が。」と珍しさうに云ふ。それから、「鴉が寒さうだから麵麭をやりたい。」とねだる。女は靜かに、「あの鴉は何にもたべたがつて居やしません。」と云ふ。子供は「なぜ。」と聞く。女は長い睫の奥に漾うて居る樣な眼で鴉を見詰めながら、「あの鴉は五羽居ます。」といつたきり、子供の問には答へない。何か獨りで考へて居るかと思はるゝ位澄まして居る。余は此の女と此の鴉との間に、何か不思議の因縁でもありはせぬかと疑つた。彼は鴉の氣分をわが事の如くに云ひ、三羽しか見えぬ鴉を五羽居ると斷言する。あやしき女を見捨てゝ、余は獨りボーシャン塔に入る。

エドワード三世（1312－1377）

倫敦塔の歴史はボーシャン塔の歴史であつて、ボーシャン塔の歴史は悲慘の歴史である。十四世紀の後半に、エドワード三世の建立せし此の三層塔の一階室に入るものは、其の入るの瞬間に於て、百代の遺恨の結晶したる無數の記念を、周圍の壁上に認むるであらう。凡ての怨み、凡ての憤り、凡ての憂ひと悲しみとは、此の怨み、此の憤り、此の憂ひと悲しみの極端より生ずる慰藉と共に、九十一種の題辭となつて、今に猶觀る者の心を寒からしめて居る。冷やかなる鐵筆に、無情の壁を彫つて、わが不運と定業とを天地の間に刻み付けたる人は、過去といふ底なし穴に葬られて、空しき文字のみいつ迄も娑婆の光を見る。

題辭の書體は固より一樣でない。あるものは閑に任せて叮嚀な楷書を用ゐ、あるものは心急ぎてか、口惜し紛れか、

がり〳〵と壁を搔いて擲り書きに彫りつけてゐる。又あるものは自家の紋章を刻み込んで、其の中に古雅な文字をとゞめ、或は楯の形を描いて、其の内部に讀難き句を殘して居る。書體の異なる樣に、言語も亦決して一樣でない。英語は勿論の事、以太利語も、羅甸語もある。左側に「我が望みは基督にあり」と刻まれたのは、バスリュといふ坊樣の句だ。此のバスリュは千五百三十七年に首を斬られた。其の傍にJOHAN DECKERと云ふ署名がある。デッカーとは何者だか分らない。階段を上つて行くと、戸の入口にF.C.といふのがある。是も頭文字だけで、誰やら見當がつかぬ。其から少し離れて、大變綿密なのがある。先づ右の端に十字架を描いて、心臟を飾り付け、其の脇に骸骨と紋章とが彫込んである。少し行くと、楯の中に下の樣な句を書入れたのが

ジェーングレー　ギルドフォード、ダッドレーの妻。(1537—1554)

プラトン　ギリシヤの大哲學者。(B. C. 429—347)

目につく。「運命は空しく我をして心なき風に訴へしむ。時も摧けよ。わが星は悲しかれ。われにつれなかれ」次には、「凡ての人を尊べ。衆生をいつくしめ。神を恐れよ。主を敬へ」とある。

通り過ぎて、銃眼のある角を出ると、滅茶苦茶に書綴られた模樣だか文字だか分らない中に、正しき畫で、小さく「ジェーン」と書いてある。余は覺えず其の前に立留まつた。英國の歴史を讀んだものでジェーン、グレーの名を知らぬ者はあるまい。又其の薄命と無殘の最後に同情の涙を濺がぬ者はあるまい。ジェーンは義父と所天との野心の爲に、十八年の春秋を罪なくして惜氣もなく刑場に賣つた。揉躪られたる薔薇の蕋より、消難き香の遠く立ちて、今に至るまで史を繙く者をゆかしがらせる。希臘語を解し、プラト

アスカム（1515－1568）

ンを讀んで、一代の碩學*アスカムをして舌を捲かしめたる逸事は、此の詩趣ある人物を想見するの好材料として、何人の腦裏にも保存せらるゝであらう。余はジェーンの名の前に立留まつたぎり動かない。動かないと云ふより寧ろ動けない。空想の幕は既にあいて居る。

始めは兩方の眼が霞んで物が見えなくなる。やがて暗い中の一點にぱつと火が點ぜられる。其の火が次第々々に大きくなつて、内に人が動いて居る樣な心持がする。次に夫が漸々明るくなつて、丁度雙眼鏡の度を合はせる樣に、判然と眼に映じて來る。次に其の景色が段々大きくなつて、遠方から近づいて來る。氣がついて見ると眞中に若い女が坐つて居る。右の端には男が立つて居る樣だ。兩方共どこかで見た樣だなと考へる中、瞬く間にずつと近づいて、余から五六間先ではたと停まる。男は前に穴倉の裏で歌を歌つて居た眼の凹んだ煤色をした脊の低い奴だ。磨ぎすました斧を左手に突いて、腰に八寸程の短刀をぶら下げて、身構へて立つて居る。余は覺えずぎよつとする。女は白き手巾で目隱しをして、兩の手で首を載せる臺を探す樣な風情に見える。首を載せる臺は日本の槇割臺位の大きさで、前に鐵の環が着いて居る。臺の前部に藁が散らしてあるのは、流れる血を防ぐ用心と見えた。背後の壁にも たれて、二三人の女が泣崩れて居る。侍女でゝもあらうか。白い毛裏を折返した法衣を裾長く引く坊さんが、うつ向いて女の手を臺の方角へ導いてやる。女は雪のごとく白い服を着けて、肩にあまる金色の髮を時々雲の樣に搖がす。ふと其の顔を見ると驚いた。眼こそ見えね、眉の形、細き面、

なよやかなる頸の邊に至るまで、先刻見た女其の儘である。思はず駈寄らうとしたが、足が縮んで一歩も前へ出ることが出來ぬ。女は漸く首斬臺を探り當てゝ、兩の手をかける。脣がむづ〳〵と動く。最前男の子に、「あの鴉は五羽居ます。」と云つたときと寸分違はぬ。やがて首を少し傾けて、「わが夫ギルドフォード・ダッドレーは既に神の國に行つてか。」と聞く。肩を搖りこした一握りの髪が、輕くうねりを打つ。坊さんは、「知り申さぬ。」と答へて、「まだ眞の道に入りたまふ心はなきか。」と問ふ。女屹として、「眞とは吾と吾が夫の信ずる道をこそ言へ。御身達の道は迷ひの道、誤りの道よ。」とかへす。坊さんは何にも言はずに居る。女は稍〻落付いた調子で、「吾が夫が先なら追付かう。後ならば誘うて行かう。正しき神の國に、正しき道を踏んで行かう。」といひ終つて、落つるが如く首を臺の上に投げかける。眼の凹んだ、煤色の、脊の低い首斬役が、重た氣に斧をえいと取直す。余の洋袴の膝に二三點の血が迸ると思つたら、凡ての光景が忽然と消失せた。

あたりを見廻すと、男の子を連れた女はどこへ行つたか影さへ見えない。狐に化かされたやうな顔をして、茫然と塔を出る。塔橋を渡つて後ろを顧みたら、北の國の例か、此の日もいつの間にやら雨となつて居た。糠粒を針の目からこぼす樣な細かいのが、滿都の紅塵と煤煙とを溶かして、濛々と天地を鎖す裏に、地獄の影の樣にぬつと見上げられたのは倫敦塔であつた。

無我夢中に宿に着いて、主人に今日は塔を見物して來たと話したら、主人が鴉が五羽居たでせうと云ふ。おや此の

主人もあの女の親類かなと内心大いに驚くと、主人は笑ひながら、「あれは奉納の鴉です。昔からあそこに飼つて居るので、一羽でも數が不足すると、すぐあとをこしらへます。夫だからあの鴉はいつでも五羽に限つて居ます」と手もなく説明するので、余の空想の一半は倫敦塔を見た其の日のうちに打壞されて仕舞つた。　余は又主人に壁の題辭のことを話すと、主人は無造作に、「えゝあの落書ですか。　詰らないことをしたもんで、折角奇麗な所を大なしにして仕舞ひましたねえ。　なに罪人の落書だなんて、當てになつたもんぢやありません。　贋も大分ありますあね」と澄ましたものである。　主人は二十世紀の倫敦人である。

夫からは人と倫敦塔の話をしない事に極めた。　又再び見物に行かない事に極めた。（夏目漱石著「漾虚集」に據る）

夏目漱石　小説家、英文學に通ず、大正五年歿。（一八六七―一九一六）

ブルータス　ローマの將軍。
カッシアス　ローマの政治家。
シイザー　ローマの大元帥。（B. C. 100―44）

四　シーザー

奥にて市民の囂々たる叫び聲聞ゆ。　ブルータス、カッシアス、及び市民大勢登場。

市民大勢

仔細を聞かう、理由といふを承はらう。

ブルータス

然らば身共に從つて參れ。　語つて聞かさう。―カッシアス殿、貴殿は何處ぞ他の街頭へ御出でなされ。　此の群衆を二箇所に別けませう。―いかに人々、ブルータスが談話を聞かむと望む者は、此のまゝ此處に留まられよ。　又カッシアス殿が談話を聞かむと望む者は、他處へ御供を致されよ。　何れにもせよ、シーザー殺戮の仔細をば、公に申聞かさう。

市民甲

儕はブルータスの談話を聞く。

市民乙　儕はカッシアスの談話を聞く。そして別々に聞いた仔細を後で比べて見るとしよう。

と、カッシアス市民の半分を伴ひ退場。

ブルータス壇に上る。

市民丙　それ、ブルータス公が上つた〳〵。静かに〳〵。

ブルータス　いかに羅馬の市民、祖國の民、我が懷かしのはらからよ。謹んで大義名分を承はれ。先づ我が是より申述ぶる詞の端を、漏れなく聽聞あらむ爲、暫く靜肅に控へ居られよ。我ブルータスが人となりにめでて、努我が詞を疑ふ可からず。又我が詞に疑を挿まざらむが爲、ブルータスが人となりを努々疑ふ事なかれ。偖汝等の智慮分別に照らし合はせて、熟と我が詞の善惡を判じ見よ。又善惡の判斷を明らかならしめんが爲、各の

胸に手を當て、全身の智慮分別を呼起せよ。—いかに此の群集の中に、豫てシーザーを崇め慕へる者あらば、我は其の者に告げて申さむ。ブルータスがシーザーを慕へる心も、決して汝に劣る事なしと。若し其の者、然らば何故ブルータスは、シーザーを討てりやと問はゞ、我は答へて申さむ。ブルータスがシーザーを思ふの念小なるにあらず、羅馬を思ふの念更に大なるなりと。試みに問はむ。汝等はシーザー死して、我等自由の民と生存へむよりも、只一人のシーザーを生あらしめ、羅馬の市民悉く奴隷と朽果つるを欲するか。我ブルータスは、シーザー我を愛するが故に感泣し、シーザー武運めでたきが故に共に喜悅し、シーザー勇敢なるが故に尊敬せり。されどもシーザー一度野心を懷きしが

故に之を討てり。彼が寵愛には涙を捧げ、彼が武運には喜びを捧げ、勇氣には尊敬を捧げ、さて彼が野心には死を捧げたり。あゝ、汝等の中、誰か甘んじて奴隷たらむ程卑屈なる市民ありや。あらば申せ、我は其の者の意に忤ひし筈。又汝等の中、誰か羅馬の市民たるを厭ふ程心鄙びたる者ありや。あらば申せ、我は其の者の意に忤ひし筈。さては汝等の中、誰か我が國家を愛せざる程心さもしき者ありや。あらば申せ、我は其の者の意に忤ひし筈。いざ〳〵、此の返答を承はらむ。

市民大勢

さやうの者は一人もない〳〵。

ブルータス

然らば我ブルータスは、何人の意にも忤はぬ。畢竟、我がシーザーに爲したる所は、汝等がブルータスに對しても、爲すべき所に外ならず。シーザー討戮の理由は、何れ議事廳の記錄に載せらるべく、彼が羅馬の爲に盡くしたる功績は、其の一分をも縮むる事なく、又彼がそれ故誅戮の憂を見たる罪科も、其の一厘を增す事なく、有りの儘に子孫に傳はらむ。

此の時四人の人夫、シーザーの屍骸を棺架に載せて登場。後よりアントニー等登場。

マーク、アントニー　ローマの政治家、シーザーの親戚。(B.C. 83－30)

あゝ彼見よ、マーク、アントニーがシーザーの屍骸に附添ひ、泣の涙で參られた。あゝ彼のアントニーは、シーザーの討戮に一指をも染めざれども、シーザー亡き後の福利を受け、共和國の民たるを得るは汝等に異ならず。聞かれよ。我ブルータスは、一言を以て汝等に別を告げむ。—ブルータスは、羅馬の福祉の爲に、我が最愛の友を屠りたり。若しいつにても羅馬の國家、ブルー

タスの死を欲すとあらば、ブルータスは今日友を屠りたる其の劍を、此の身に受くるを辭せずと知られよ。

と、壇を下る。

市民大勢　いや〳〵、ブルータス公、何時迄も壯健で在せ。

市民甲　序に御館まで、賑やかに御送り申さうではないか。

市民乙　御先祖同樣の彫像を、此の公にも奉れ。

市民丙　此の公をシーザーの後に直さうではないか。

市民丁　いかにもブルータス公を後に直せば、シーザーの美質だけが王位に備はるといふものぢや。

市民甲　さあ〳〵、ブルータス公を囃音頭で送り込まうではないか。

ブルータス　いや〳〵、祖國の民。—

市民乙　これ靜かにしやれ。ブルータス公が物を仰せらるゝ。

市民甲　靜かにしやれ〳〵。

ブルータス　いや、懷かしの國人、志は嬉しけれど、其の心配は無用なるぞ。汝等は我が爲に、アントニーと共に留まり、シーザー公の遺骸を拜し、又アントニーが我等の許可を受け、故公の遺烈に手向くる追善の辭を聽いて遣はせ。いや、ブルータスが汝等への願ひには、アントニーが辭終るまで、一人も餘さず此の處に留まり居れ。我は一人にて歸館致さむ。

と、ブルータス退場。

市民甲　さらば此處で、アントニーの悼辭を聞くとせうかい。

市民丙　いかにも、早う壇へ登らせて聞くとせう。—アントニー公、早う〳〵。

アントニー　ブルータス公の御情を以て、汝等一同にかく見ゆる

は、拙者身に取り此の上の喜びはない。

と、アントニー壇に上る。

市民丁　何、ブルータス公を何と申した。

市民丙　ブルータス公の御情で、我等一同に見ゆるは喜ばしいと申された。

市民丁　此處でブルータス公の讒訴など申したら、無事には濟むまい。

市民甲　想へば此のシーザーは暴君であつたよなあ。

市民丙　いかにも其の通り、羅馬の國が、此の様な暴君の手を逭れたは嬉しい事ぢや。

市民乙　これ靜かに〳〵、アントニーが詞を聞きやれ。

アントニー　いかに我が羅馬の良民達。—

市民大勢　これ靜かに、聞えぬ〳〵。

アントニー　我が懷かしの友よ。羅馬の民よ。祖國の民よ。暫く汝等が耳を借らむ。かく申す拙者は、シーザー公の御遺骸を埋めむが爲に參りし者、今更公が功績を讃ぜむがためにはあらず。それ人間一生の罪過は死後に殘り、一代の功勞は骨と共に埋るゝこと珍しからず。惟みるに、シーザー公が一身亦此の如し。彼の高德の譽れ高きブルータス公には、故公非望を懷ける由汝等に告げしよな。誠に其の御詞の如くならば、痛ましき罪過といふべく、又故公には、痛ましくも其の報いを受けさせられた。此のアントニーは、ブルータス公、並に一味の方々の許容を受け、—あゝ想へばブルータス公は當代の君子、一味の方々とても悉く當代の君子ならぬものなし。故公の御葬儀に莅み、追悼の一言を申述

べむが爲に參りし者。抑故シーザー公は、此のアントニーが兼ねて追慕の友なりしが、他人は知らず、アントニーに對しては信義に深う在されたり。なれどもブルータス公の御詞には、故公非望を懷かれたと申す。

してかく申さるゝブルータス公は當代の君子に在す。

又シーザー公には、度々の外征に、數知れぬ敵國の捕虜を連れ還り、其の度毎に莫大の贖回金を得て、之を悉く羅馬の國庫に積み、己が私腹を肥しゝことなし。あゝ此の如き御行爲に非望ありとは誰が目に見えしぞ。

又羅馬の下民共、一年貧苦に泣きし時、シーザー公には彼等と共に泣かれしならずや。あゝ、かゝる優しき胸の中に、非望は果して宿るべきか。なれどもブルータス公は、シーザー非望を懷けりと申されたり。但しか

く申さるゝブルータス公は當代の君子に在す。又去んぬるルバーカルの祭日に、此のアントニーが三度王冠を捧げたるに、シーザー公には三度そを退けられしは、汝等とても眼の當りに見られし如し。あゝ、想へばこれが何の非望。なれどもブルータス公は、シーザー非望を懷けりと申されたり。してかく申さるゝブルータス公は、疑ひもなう當代の君子に在す。—いや、拙者はブルータス公の御詞をとやかく申さむとは思はず。只我が知れる所をさながら申述ぶるに過ぎず。又汝等にも、一度はシーザー公を慕はれしが、實に慕ふべき理由ありければならむ。然るに今將何の理由あつて、公の爲に哀悼の涙を注ぐをさへ屑しとは思はざる。あゝ、道理は去つて禽獸の肚裡に隱れ、人は分別を失ひ

たるか。『許せよ、人々。拙者が心は、今故公の棺中に逃入りたり。其の心の此の胸に還り來る迄、アントニーは最早詞も出し難し。

市民甲　聞けばアントニーの詞にも一理はある。

市民乙　とつくりと考へて見れば、どうやらシーザー公には無實の罪で殺された樣ぢや。

市民丙　さうであらう〳〵。どうやら却つて一段と恐ろしい虐主が、現はれさうに思はれるわ。

市民丁　今のをよう聞きやつたか。シーザー公は王冠を受けつけぬ。なりや非望を懷かぬは確な事ぢや。

市民甲　ほんに其の通りなら、こりや此のまゝには過されぬ。

市民乙　見やれ、いとほしげに、アントニー公が眼は、泣腫らして、火のやうに眞紅ぢやわい。

市民丁　聞きやれ、又口を開いた。

アントニー　大シーザーの一言には、世界も鳴りを鎭めしは遂昨日の事なるに、今日は果敢なき此の御姿。如何なる卑賤の民なりとも、畏れ敬ふ者はあるまい。おゝ人々、汝等が心を嗾かし、怒りたけり狂はしむるは易けれども、さては汝等も知れるが如く、當代の義人君子たるブルータス公、さてはカッシアス公を辱しむると申すもの、某は左樣の事は致さぬ。かやうなる義人君子を辱しめうよりは、寧ろ口なき死人を辱しめ、拙者自らを辱しめ、さては汝等一同を辱しめう覺悟なるぞ。然し聞かれよ。茲に一枚の書附あり、こはかく申す拙者自ら、故公御手馴しの手函の中より探り求めしものなるが、豫てより認め置かれたる御自署の遺言狀なり。苟も羅

馬の民たらむ者、此の書附の趣を聞知らば、—素より拙者に之を讀聞かさむ意はなけれど、—直ちに奔り寄つて、御遺骸の傷口に接吻し、所持の手巾を其の有難き血に浸し、さては御髪の毛の一條を記念に乞ひうけ、家の寶と末長う子々孫々に讓り傳へ、秘藏致さむなど、葬めきかくる事なるべし。

市民丁　何ぢや、遺言ぢや。聞かにやあならぬ。アントニー公、御讀上げ下され。

市民大勢　遺言ぢや〳〵。

アントニー　暫く〳〵。シーザー公の遺言を聞かにやならぬ。シーザー公が如何ばかり汝等を愛せしか。優しの我が友。讀上ぐる事は叶ふまい。そを承知致さば汝等が身の爲ならず。汝等とて、木にもあらず、石にもあらず、情を知る人間ならずや。苟も人間の皮

を被らむ者、シーザー公の遺言を聞かば、忽ち火の如く怒り立ち、物狂はしくもなり果てむは眼に見る如し。シーザー公が遺言して、汝等に遺物を殘せりと聞くは、汝等の爲ではあるまい。若しさやうの事を聞くならば、おゝ、其の後の成行が思ひ遣られて恐ろしや。

市民丁　いや、是非共御讀下され。アントニー公。此のまゝ聞かずには濟まされぬ。遺言を御讀下され、シーザー公の遺言を。

アントニー　いや暫く。此の一事を汝等に打明けたは、返す〳〵も某が過言、シーザー公を殺害致しゝ彼の君子達へ無禮には當らぬか、案ぜられる事ではある。

市民丁　やあ〳〵、何の君子達、彼奴等は謀叛人ぢや。

市民大勢　遺言聞かう〳〵。

市民乙　いや彼奴等は悪黨ぢや、暗殺者ぢや。遺言聞かう、遺言讀め。

アントニー　さては一同には何處迄も、某に遺言を讀ませうとた。あゝ悔いても及ばぬ事ぢや。然らば一同御屍骸の周圍に環を作つて並ばれよ。先づ此の遺言の主が御有樣を一同に示したい。就いては某は壇を下る。一同承知であらうな。

市民大勢　承知々々、少しも早う。

市民乙　お下りなされ。

アントニー　壇を下り、屍骸の枕邊に立つ。

市民丙　いかにも一同承知の上ぢや。

市民丁　さあ〳〵、環を作つて、圓く並べ。

市民甲　柩へ寄るな、御遺骸へ觸るまい。

市民乙　アントニー公の席を明けい。やれ〳〵、アントニー公は貴い方ぢや。

アントニー　これ〳〵、其の樣に詰懸るな。後へ〳〵。

市民大勢　後へ退れ〳〵、席を明けい。

アントニー　さて一同には、涙あらば只今流す用意を致されよ。見られよ、一同にも此の上衣に記憶あるべし。嗟想ひぞ出づる、折しも夏の夕、恰もネルヴヰ*の蕃族を平定なしたる當日の事なりしが、陣幕の中にて初めて之を着られたを、拙者は未だ忘れも致さぬ。見られよ、此の上衣の表のこれなる傷は、カツシアスが匕首の透りし痕、又これなるは、勇猛無比のカスカ*が刀痕、又これなる傷口は、御寵愛のブルータスが劍の通ひし路。いかに人々、其の時シーザー公の御血潮が、刃の後を追つかけて、

ネルヴヰ　今のベルギー邊に住みし民族。

カスカ　シーザー暗殺者の一人。

さつと迸り出でたる痕に目を留めよ。只今公が、御胸の扉を叩けるブルータスは、殺意あつてか、さもなきか、様子如何にと見屆けんと、戸口を走り出でたる御風情。思うても見よ。彼のブルータスが、シーザー公の厚き御寵愛を蒙りしは、一同も承知の通りならずや。――想へばシーザー公には、飼犬に御手を嚙まれしも同然。されば此の數ある御負傷の中で、これに增す御深傷はなし。さてこそ御寵愛のブルータスが、己を刺すよと見られしとき、シーザー公の御胸には、日頃かくまで恩寵を加へし者が、忘恩背德の擧動に及びしかと、後悔の念が一杯で、其の外の叛人共が太刀・劍の傷よりも、其の御無念故に御落膽。彼の大裕な御心も沮喪して、御上衣を以て御顔を掩ひしまゝ血潮の飛沫に漬りたる、ポンペーが彫像の臺下に果敢なき御最後を遂げられたるぞ。かく申すアントニーも、汝等一同も、はやこれにて羅馬市民の最後を遂げしなるぞ、人々。今や非道の叛人横行して羅馬は闇。おゝ、一同にも泣かるゝか。哀悼の情を催さるゝと見えた。それこそ汝等が善心を泣く涙。優しの人々よ。乍然、汝等にはシーザー公が衣服の傷痕を見たるのみにて、はや其の様に泣かるゝか。此處を見よ、逆徒の劍に抉られたる、これ此の肌膚を覗かれよ。

ポンペー　ローマの將軍。(B.C. 106―48)

市民甲　おゝ、いたましの御有様。

市民乙　おゝ、彼の偉いシーザー公を。

市民丙　何といふ悲しい事ぢや。

市民丁　えゝ逆徒奴、叛人奴。

市民甲　淺ましい有様ぢやなあ。

市民乙　此の仇は取らにやあ措かぬ。

市民大勢　さあ〳〵、復讎ぢや。—出懸けろ〳〵。—探し出せ。—燒いて仕舞へ。—殺せ。—屠れ。—逆徒一人も生かして置くな。

アントニー　いや待たれよ、人々。

市民甲　待て〳〵、アントニー様が物を仰せらるゝわ。

市民乙　アントニー様のいふ事なら承はらう。仰せにも從はう。我等が命も差出さう。

アントニー　優しの友よ。懷かしの同胞よ。俄かに潮の寄せる様な一揆三昧は愼まれよ。此の慘事を敢へて爲した人々は、當代の義人君子なるぞ。如何なる內密の理由あつて、斯かる所業に及びしか、拙者には合點參らねど、賢慮に富み、仁義に明るき彼の人々、汝等がよう合點の

參る樣に、必ず辯解を致さるゝならむ。聞かれよ、人々。拙者は決して汝等が心を動かさむとて來りしならず。此のアントニーは、ブルータスの如き辯者にあらず。豫て承知のごとく、たゞ〳〵友誼に脆き、朴訥野鄙の木强漢、彼の人々とても、かくと承知の上なればこそ、かく公に此の拙者が、シーザー公の御身の上に就き、一同に語るを許されたれ。此の拙者は人の血を亂すべき頓智も頓才もなく、辯舌も音聲も持合はさぬ。只有りのまゝを語る外に能もない。只、汝等に申しゝ所も、既に汝等の知れる所を反復し、さては故公が御傷口といへる無言の口を指示し、拙者が詞に代へたる次第、乍然、若し此のアントニーと、彼のブルータスとが入違へ取替つたなら、此のアントニーは、辯才を以て汝等が精神を

かき亂し、シーザー公が御傷口には、一つ〳〵に舌をつけ、羅馬中の石礫をさへ、奮ひ立たせずには措きはせまい。

市民大勢　いや我等とて、此のまゝには濟まされぬ。

市民甲　ブルータスの家を燒いて仕舞へ。

市民丙　さあ〳〵、出懸けよう。叛人等を探し出せ。

アントニー　いや待て、まだ〳〵申す事あり、申聞けたい事がある。

市民大勢　これ〳〵靜かにせい、アントニー樣の御詞を承はれ。

アントニー　いかに人々。汝等は無我夢中の擧動を致さるゝ。抑、何の廉を以て、汝等さばかりシーザー公を御慕ひ申すぞ。あゝ、汝等は自らそを承知致さぬ。此の上は某が語つて聞かさう。汝等には、拙者が先刻申聞けたる遺言の一條をはや忘れ果てしな。

ドラクマ　ギリシヤの貨幣。一ドラクマは約九片に當るといふ。

タイバー　ローマ市の西部を流る。

市民大勢　いかにもさうぢや。先づ〳〵此處で遺言を聞いて往かう。

アントニー　シーザー公の御自筆の遺言狀は卽ち此處に、—（と書付を讀みながら）羅馬の市民全體へ、一人毎に七十五ドラクマの貨幣を遺物として遺はすべしとある。

市民乙　いや、見上げた御心ではある。此の復讎は我等が致す。

市民丙　おゝ、有難いシーザー公。

アントニー　先づ靜かに聽聞あれい。

市民大勢　靜かに〳〵。

アントニー　此の上に又シーザー公には、御所有のあらゆる莊園・別邸、其の外新設の庭園等、タイバー河の此方にあるを、悉く汝等に讓り、永世子孫に傳へしめ、長く遊覽娛樂の場となさしむるとある。—あゝ、シーザー公は既に亡き

人の數に入りたまへり。何時の世にか又羅馬に此の如き偉人あらむ。

市民甲　いや〳〵、此の樣な偉人が又とあるものか。やい〳〵、皆の衆、シーザー公の御屍骸を禮堂（公會堂内にある）で燒いた上、其の燃燼（ネンジン）で叛人等が家々を燒拂へ。さあ〳〵、御屍骸を擔げ〳〵。

市民乙　誰ぞ火種を持つて來い。

市民丙　腰掛共を打碎け。

市民丁　腰掛でも窓框でも、何でもかでも引摺り出せ。

と、市民大勢屍骸を擔ぎ退場。

アントニー　いや、藥は大分廻つたやうぢやな。これでどうやら騒動の種を蒔付けた。萌出る末が待たるゝことではある。

オクタビアス（B.C.63－A.D.14）

*オクタビアスの近侍登場。

アントニー　近侍　やあ其の方か、樣子は何と。オクタビアス樣には、既に羅馬へ御着きなされました。

アントニー　近侍　して御宿は何處ぢや。

レピダス（－B.D.－13）

*レピダス樣と御兩人にて、シーザー公の御館へと御越しなされました。

アントニー　然らば拙者も、早速參上致し御意を得よう。願うたり叶うたりの御入來。運の神は我等に笑顏を見せさせらるゝ。此の模樣では、何ぞ我等に善い物を取らせらるゝ事であらう。

近侍　道々噂を聞きますれば、ブルータス・カッシアスの兩人には、狂人の樣になつて、羅馬の城門を騎りぬけたと

の事でございます。

アントニー　定めて彼等とても、拙者が詞故に、人民の心動きし由を薄々聞かれしならむ。―いざ〳〵、オクタビアス殿の許へ案内致せ。

と、兩人退場

（戸澤姑射譯「シーザー」に據る）

五　藝術の表現

世間の人は繪を見ましても、又文章を見ましても、あんなものは實際にありはしないと云ふことをよく申します。

昔から繪空事と云ふ言葉が出來て居ります、卽ち繪は嘘を描くものだと云ふやうに相場が極つて居る。卽ち「あんな長い手はありはしない。あの花は瓣が六つの筈である」が、あれは八つに描いてあるから嘘だ。」と云ふやうな事を申して、畫を批評する人があります。是は藝術の何たるかを了解しない世間普通の素人に一番よくある事で、つまり藝術と云ふものは嘘を描くものだと云ふのです。藝術家の中にも、さう云ふことを思つて居る人があるらしいが、科學萬能を信じて居る人たちがよくさういふ事を言ふ。或植物學者が展覽會の繪を見まして、一々片端からあの木の葉は彼處が間違つて居る、此方の花の蕚はあれは本當でないと云ふやうなことを言つて批評して居つたのを見た事がありますが、是はまた御苦勞千萬な餘計な詮議だてだと思ひました。之に就いては、佛蘭西のロダン*の傳記の中にも次のやうな有名な話があります。或南米の金持が、ロダンに彫刻を依頼して肖像を造つて貰つた。所がちつとも似て居ないと云つて、ロダンにそれを返してしまつたと云ふ

ロダン　フランスの彫刻家（1840―1915）

のです。ロダンは言ふまでもなく、世界に於ける近代の大藝術家である。其の人の作つた作品が、全くの素人の眼には、實物に似て居らぬからと云つて落第してしまつた。斯う云ふことは何を語つて居るのでせう。若し唯外面的に、或る事象を寫すと云ふことが、藝術の本意であるならば、安物の寫眞の引伸しを使つて置けば宜い。

藝術家が自分の心血を注いだ風景畫よりは、地圖と寫眞を置いた方がずつと宜いわけです。人の顏を見て其の恰好を似せて描くと云ふことは、安つぽい畫の書生にでも出來ることである。そんな事は堂々たる大藝術家の手腕を俟たないでも出來るのです。若し眞の藝術家に向つて、似せて描いて下さいと云つて注文したならば、實物の形を似せる位の繪ならば、お易い御用だと云ふでせう。其の代り自己の本心や自己の技倆や、藝術的良心に訴へてお斷りする、寫眞屋の下働き見たやうなことはしないと云ふに違ひない。そこで、それなら藝術はやはり嘘を書くのか、文章でも或は繪でも、あれは皆出鱈目を書くのかといふお尋ねが出るかも知れませんが、藝術は飽くまで眞を描くに相違ない。繪の事は私が口先や、手眞似で一寸云ふ譯には行きませぬが、文章の事に就て申しますと、櫻花の爛漫たるを見て、あれは雲か霞かと云ふやうな事を申します。さうして實際雲のやうな、或は遠山霞の樣なものを描いて、滿朶の櫻の咲亂れて居る所だと云つて居る、確に嘘だ。所が顯微鏡で櫻の花を調べたものよりも、「花の雲」の方が本當の感じ、本當の眞を現して居る。一々櫻の瓣を描いたよりも、吾々には雲か霞か、ぱつと淡墨でも流して置いてくれる方が眞である、誰

にも眞である。例へば人相書でも、あの人の鼻は斯うずつと上から降りて來て、前の方へ何吋つき出て居ると云ふことを記述するよりは、彼の人の鼻は尺八に似て居ると言つた方が、藝術的表現を與へて居る。「尺八のやうな」と云ふと、文章で申しますれば一の simile（シミリイ）を使つてある爲に、其の眞が活きて現はれて居る。支那人と云ふものは非常に誇張の上手なものである。兵隊が一萬も居らうものなら、百萬の大軍と言つてしまふ。支那の軍記物などには實に之がうまく行つて居るのがある、つまり嘘ですな。法螺は嘘の一種ですが、白髮三千丈と言つて人を馬鹿にして居る。三千丈は愚、一尺もありはしない。所が三千丈と云ふことを聞くと、如何にも長く垂れた白髮のやうな氣分が出る。あれは眞赤な嘘ですな。

白髮三千丈　唐李白の詩に曰く、白髮三千丈、緣レ愁如レ箇長、不レ知明鏡裏、何處得ニ秋霜一

嘘であるかも知れないが、それが十分に或意味の眞を私どもに傳へて居る。

そこで詭辯を弄するやうでありますが、眞に二種あると斯う申す外ないと思ふ。卽ち第一の烏口や定規を使つて描いたやうなもの、卽ち寫眞に寫すところの眞。あれは吾々の理智の方面或は客觀的或はサイエンスなぞから見た考へ方で、卽ち一遍私共の頭の中で理屈をこねて判斷して見る、或は解剖して見る。例へば彼處に花のやうな物がある。それを吾々が、ちよいと見た刹那の印象でもなければ感情でもなく、あの花は何だ、櫻か何だと云つて研究して見る。卽ち言を換へて云へば、其の物を分析し解剖して見て、始めて吾々は其の科學的の眞を摑み得るのです。

卽ち美しい物までも汚い物にしてしまつて見なければ

氣が濟まぬ。それでなければ眞でない、藝術家は嘘八百を言ふものだと言つてしまふ。あゝいふ人々はつまり一方にばかり頭が働くのであるが、さういふ意味の眞を名付けて科學的眞とでも申して置きませうか。即ち吾々の直覺で感じた所の眞ではなくして、一遍其の物を殺して、さうして解剖して、頭の中でぐる〳〵と廻して見て理屈をこねる。例へば水と云ふものは、行く川の流れとか、甘露のやうな水とか言へば、誰の頭にでも端的に初から藝術的にぱつと現はれる。ところが科學者は、水と云ふものをH_2Oと解剖して、それでなければ眞でない、そんな甘露の様な水などはありやしない、其の中には黴菌が澤山居るに違ひないと言ふ。極度に科學的精神に支配された頭になると、どうしてもそれでなければ承知が出來ないのです。それから先程申し

ました白髮三千丈式の眞を名付けて、私は藝術上の眞だと申します。即ち眞 true であると云ふ點に於ては前者と肩を並べて少しも劣らぬ、嘘だと言はれたら告訴して然るべき性質の者である。決して嘘は言つてゐない、飽くまでも眞である。即ち白髮三千丈といふのは、白髮何尺何寸といふのと同じだけ眞である。是は私共の感じ、即ち吾々の直感作用に訴へるのであつて、三段論法流の理屈や解剖や分析の作用によらないで、端的に吾々の腦裡に眞を閃めかすといふことに依つて表現としての眞と云ふ意味があるのです。理屈など言つたらもう打壞しです。下手な歌詠みは理屈や説明をならべて、それで歌になつて居る積りで居るが、あれは本當に藝術にならない「ぬた」と云ふものです。吾々の直感の作用、或は感じです、感情でも宜しい、それが端

的に白髮三千丈と言つたり、あの人の鼻は尺八のやうだと言はれて、ひかりと吾々の頭の中に何物をか閃めかすことが出來れば、それは表現としての眞を立派に寫して居るのである。（廚川白村著―「象牙の塔を出て」による）

六　井伊大老の決意

井伊大老　井伊掃部頭直弼、近江彦根の藩主なり。安政五年四月擢んでられて幕府の大老職となり、萬延元年三月三日櫻田門外に於て、水戸藩士に要擊せられて斃る。年四十六（一八四五―一八六〇）

松平　左兵衛督信發をいふ。（一八四四―一八五〇）

狩野永岳　京都の人、狩野派の畫人なり。（一七四五―一八二七）

壽像―永久の生ノ像
生前の自己の像

松平「今日は宵節句の御催しに、御案内を受けて有難うございます。直ぐ御茶室へとの事でしたが、ちと御内談申したい仔細があつて、押して此方へ通りました。御來客の御邪魔でもした譯ではありませんでしたか。」

井伊「いや、今日はようこそ來て下さつた。只今のは、別に來客といふ譯ではありません、かねて狩野永岳に賴んで置いた私の壽像が出來上りましたので、それを國元の清涼寺へ納める爲に、使者に托したのでございます。」

松平「ではあの御壽像が愈出來いたしましたかな、それは拜見いたしたかつた。……併しその繪姿よりも、斯うして束帶の正のお姿が拜まれたのは、珍らしい事と思ひますが、畫工にお寫させなさる爲でございましたか。」

井伊（微笑）「いや、今日は一寸參内しましたのぢや。」

松平（訝かしさうに）「え……」

井伊「大裡へな。」

松平（頷き）「成程……御心中察し入ります。」

井伊「掃部頭、存生中は、最早京都へ參朝する時節も來まいと思ひましてな。」

松平「一應は御尤もとも思ひますが、併し人間は命さへあれば又どのやうな風が吹いて來るか分つたものではご

ざいませぬ。　已に去年の秋もおめがねに依り、不肖大任を承つて、水戸家へ御上使に立ちました夜は、もう必死の覺悟で、二度と御目にはかかれぬものと思ひ詰めて居りました。　案の定、血氣に逸る水戸武士の爲に危く一命を失ひかけましたが、同家の家老等に支へられて、首尾よく大任を果し、復命に及びました節は、ほつとして再生の思ひをいたしました。　お蔭で今年も亦斯うして麗らかな春にめぐり逢ひ、宵節句の御招きに預る事が出來ました。　下世話にも申す通り、生命あつての物種でございます」。

井伊　「御尤の次第ぢやが、その生命といふ奴が有るやうで無いもの、無いやうで有るもの、かげろふの如く、又電の如く、眼には見えても確と摑へ様のないものでございま

すから、それに執着するのは、迷の因でございませうでな。」

松平　（膝を進め）「いや、實はその事で、御内談したいと思つたのでございます。　大老のお生命は今こそ最も大切になさらなければならぬ時でございますぞ。　御自分の御生命であつて御自分のお生命ではない。　天下の爲、又幕府の爲に、預り物のやうな大切なお生命ではございませんか。　近頃水戸家へ御達しなされた例の別勅返上の御上意から、水戸藩の荒氣な向う見ずの武士等、大勢長岡驛*に屯して、容易ならぬ形勢になつてゐました處、已に御聞及びでもございませうが、其の中の誰彼はひそかに脱走して、江戸城下へ入り込みました様子でございます。　元來、水戸家の陰謀を覆し、前中納言*家を

長岡驛　常陸笠城郡にあり。長岡村といふ。

前中納言　德川齊昭をいふ。

蟄居させ、又此の度、別勅返上の上意を傳へられる事になつたのは、皆大老のお腹一つから出た事と、彼等は一圖に大老を怨み、首を獲て甘心しようとまで、逸りに逸つてゐるのは、鏡にかけて見るやうなものでございます。大老の御生命は、誠に風前の燈とも、草頭の露とも申すべきものでございませう。この際一時、御職務を辭退せられ、彼等の無謀の力を避けられて、天下の爲、又幕府の爲に、無くてはならぬかけがへのない大切な御生命を行末永く取留る策を取られるのが、眞の忠節の道かと信じます。そして世間の物議の自ら鎭る日を見計らひ、再び出仕せられるのが善からうかと思ひます。日常の御交誼甲斐に、左兵衞督が赤心を打割つた御忠言を申します、枉げて御聽入れ下さい。」

先將軍家　徳川十三代將軍家定をいふ。

幼君　徳川十四代將軍家茂をいふ。

井伊「御親切は忝い。……御好意の程はなんとも御禮の申上げ樣もありませんが、私は、先將軍家の遺命を奉じて、幼君を輔佐する大任に當つて居るのでございますから、一身が危いからと云つてその職を去る事は出來難うございます。まあ見られい、あの額の「至誠」の二字も、近頃幼君が自ら御筆を取つて、書いて下し置かれたもので、今更、命惜しさに、逃げも隱れも出來ますまい。萬、御察し下さい。」

松平（顏を見あげて沈思）「……御胸の中の苦しさは萬々御察し申して居りますが、今一應、篤と御考へ直しを願へますまいか。御一生、御隱退なされいと云ふのではありませぬ、こゝ一時の事でございます。その方が却つて

井伊（遮つて）「いや、御注意はよく分つて居ります。今日まで一家一門のものも、さまざまに諫言はしてくれましたが、私は一旦自分の心で斯うと定めた事は、誰方がなんと云はれても枉げませぬ、枉げては自分でなくなります。唯、御厚意は決して忘れませぬ。」

松平（ほつと嘆息をついて）「……その御氣象はよく呑込んで居りますが、今日の形勢を見てはどうも默つては居れませんので、御忠言を申しました。……どうしてもお聽入れがなければ致方もございませんが、では、せめて今後は御供廻の人數を増して、十分に警固させ、聊かも手ぬかりのないやうに、御用心の上にも御用心をなされるやうお願ひします。」

井伊「左兵衛督、生死禍福は一に天命によるものではございませんか。刺客が若し私を斃さうとしても、天命が來なければ斃す事は出來ますまいが、若しそれが果して天命なら如何に用心しても避ける事は成りますまい。その上、供廻の人數にも自ら一定の格式がありますから、自分が大老の職に在つて、自分でそれを破つては、三百の大小名を取締る事は出來かねませう。折角の御忠告ぢやが、それも何卒御察し下さい。」

松平（熱心に）「御説一應は御尤もでございますが、私は大老御一人の爲に申しては居りませぬ。東照宮以來、今日まで二百五十年、天下御威光に服して、三百の大小名一人として臺命に背くものはなかつたのでございます。それが黑船渡來一件からは兎角、世の中の大綱が弛んで、どうなる事かと危ぶまれましたのに、それを二度ぐ

つと引緊められて、今權威赫々たる幕府の大老たるわ身が、萬一刺客の手に罹られるやうな不祥事でも出來ましたら、それこそ天下の御威光も忽ち地に墜ちて、國家の礎は覆るかも知れませぬ。　さすれば假令職務の爲に御斃れなされても、天下の御爲にはなりませぬ。いや却つて敵方には己が威福を縱にした爲に、天罰が下つたのぢやと嘲られ、味方の爲には犬死同然と申すものではございませんか。」

井伊「……左程まで私の一身を思うてくれられ、又天下の爲を憂へてをられる貴殿の誠心は、私の胸にこたへました。　決して疎かに聞流したくはございませんが、實は私も夜半に、人が寢靜まつた頃、唯獨りでつくづく自分の胸に問ひ、胸に答へて見ますると、敵方の所謂、己が威

摩泥の玉
菊王の歌の中にある玉。

福を縱にするといふ譏も、悉く中傷許りではないやうに、思ひ當る節がございます。　いや、自分では強ち然う氣附いてした事で無うても、一旦斯うと信じたら、何處何處までもそれをやり通さうとするのは、己に自分の我執とも云へませう。　自分の我執と、他人の我執とが、かち合つて、世の中には爭も起り鬪も始まる。　それも達觀すれば、苟も生を享けた者が、此の娑婆世界の濁つた壺の底の方から、明るい瑠璃光の空を慕うて、浮び上らう〳〵と、互にもがき、あがく阿吒の息吹き、機根のはづみで、唯一圖に、その爭が醜いとも、その鬪が呪はしいとも云ひ切れませぬ。　泥土の底をくぐつて來なければ、清淨無垢の蓮華は咲かない。　砂礫の中からも摩泥の寶珠が拾はれぬものでもない。　世に常住の善もな

く、不斷の惡もなく、凡てが裁かれるのは、唯盡未來際期の彌勒の出世を待たねばなりますまい。……いや、大分御法談めいて來ましたが、まあこれで自分の我執は已に通してゐます。自分のしたい事、すべき事と思ひ詰めたものは、先づ形が附きました。唯一つ、姉小路局が京都での折角の骨折甲斐が、漸く見えかゝつて來たのを、最後まで見ないで死ぬのは心殘りでもございますが、これとても先づ見込は十分立つてゐます。

薪盡きて火は滅する。幕府への御奉公も、もう仕納めの時節が到來したかと思ひますから、この上は、私が刺客の手にかゝるのが寧ろ本望で、それで他人の我執が通り、今まで鬱憤に鬱憤を重ねた水戸の君臣等の幕府に對する怨みも解けませうから、却つて天下の爲かと

彌勒　菩薩の名。未來に兜率天より人間界に出現して、人天を化益し給ふといふ。

姉小路局　名はいよ、本姓橋本。本丸大奥に勤め大に權を弄せり。直弼の内命を受け、皇妹和宮御降嫁の斡旋につとむ。後剃髪して勝光院といひ、明治十餘年歿すといふ。

思ひます。

松平（少し鋭い口調）「天下に、幕府を怨んでゐる者は水戸許りだと思はれますか。」

井伊「いや水戸許りではありますまい。いや幕府も私も天下の諸藩に怨まれてゐませう。斬つたものは斬られ、殺した者は殺されるのが、因果の道理で、私はあの大獄を起す時、始めからその覺悟を定めてかゝりました。私はなんでもないが、實はそれよりも恐しいのは封建世襲の制度が、今天下萬民の心に呪はれてゐる事で、あの黒船の渡來は、その封建制度瓦解の警鐘を打鳴らしたものでありました。これも時勢ぢやが、去年の暮に御本丸の燒落ちたのを見た掃部頭は、この黒い眼でもう一度幕府の瓦解をまで見たくは思ひませぬ。……又

二度と再び同胞の血を見てはなりませぬ。

松平（眼を睜つて）「えッ、では幕府は瓦解との見込みでございますか。」

井伊「いや、これは唯、私の不吉な夢物語だから、決して御他言は下さるな。」

松平「不吉な夢物語、……然うでございませうとも、……そんな筈はありません。いや大老の御存命中は決して左様な事はありますまい。是非とも御生命を大切になさるやう、折入つてお願ひ申上げます。」

宇津木（出來り）「お客様方、お揃ひにございますが。」

井伊「さうか……では服を改めよう。」

松平「今暫らく……の間……」

井伊「もう御說は十分承りました。……御免。（起ちかゝる）

宇津木
宇津木六之丞、井伊家の老臣なり。（二四六九—二五二）

松平「あ……ま……暫らく」（袖を捉へる）

井伊「御放しなされい」（振り切つて駈入る）

松平（後を見送つて）「ああ、大老の御大難は最早旦夕に迫つてゐる。日頃別懇に願つてゐる私が、それをお救ひする事が出來ないのは殘念至極ぢや。」

宇津木「主君のお身上をいろ〳〵御心配下されまして、誠に忝う存じまする。何を申しましても一旦斯うと御定め遊ばした事は、枉げる事も弛める事もふつふつ御嫌ひなあの御氣象で、生死の海を一足飛びに飛越さうとなさつて居りますので、傍からは唯手をあげてはら〳〵する許りでございます。御親切の程は、一同忘れはいたしませぬ。」

松平「日頃は誠におもの優しい、女子供もなづく御方だが、い

ざとなつたら、假令泰山眼前にくづるゝとも、びくともせぬ膽の据つたお人ぢや。死を恐れぬ御覺悟が出來てゐるから、我等が千言萬語も、遂に何の役にも立ちさうもない。ひよつとすると、今宵はお別れの御酒宴のおつもりではないかな」。

宇津木（考へながら）「いや、左樣な事はござりますまい。……左樣な不吉な御酒宴ではございますまい。宵節句をお祝ひなさるのは御嘉例になつて居りますから」。

松平「ふむ……何にしてもまだ四十六七のお働盛りを、今死なしては惜しいものぢや。右から見れば何物も恐れぬ勇武果斷の三河武士の標本で、左から見ると、一切に悟入して生死の淵を越えた禪僧の俤がある。斯ういふお人には、信發、生涯にもう二度とは逢へまい。幕府の爲にも、又天下の爲にも、大老の御一身に誤のないやう、此の上は其の方等家臣一同が、皆一つ心になつて、氣を附ける事より外に途はない、私からも賴む」。

宇津木「はッ……此の上とも、一寸も油斷せぬやうに、一同とも申合せて、氣を附けるでございませう」。

松平「何卒、さうして貰ひたい。……長野主膳にもさう傳へてくれ。主膳は今日は何うした」。

宇津木「茶室の方に控へてゐる筈でございます。もう時刻も少し遲れました。何卒、殿にも茶室の方へ御越し下さいませ。御案内申上げます」。

松平「……兎に角、大老のお手前、一服頂戴しませうか。」

（中村吉藏著「井伊大老の死」による）

長野主膳　井伊家の臣、よく公武の間に周旋して直弼を輔けたり。文久二年死に處せらる。

十五代將軍　徳川慶喜（一八二七—一八九七）

侯爵　池田仲博、慶喜公の子、池田家を嗣ぐ。

七　十五代將軍の片影

ある年の夏の初めのころであつた。侯爵から、麻布市兵衛町の本邸で晩飯を食はせるから來ないかとの招待を受けたので、私は指定された時刻にお邸へ伺つた。其の頃私は醫者の持つよりはも少し大きな、先づ辯護士か、高利貸などが持つて居さうな黑皮の古風な鞄を提げて、毎日の樣に鎌倉から東京の假事務所、——下宿屋の一間に設けた——に出勤して居たので、其の日も時間の都合で其の假事務所には寄らず、新橋の停車場から其の鞄を提げたまゝ直ぐお邸に出掛けたわけである。埃だらけの下駄を引きずつて門内に這入つて行くと、其所には一臺の馬車が玄關の前に横たはつて居た。紋を見ると葵の紋がついてゐた。他に

大坪氏　池田家の家職にて俳句などを嗜み、虚子の舊知。

來客があることとは承知したが、兎も角、招待を受けた時刻であるからベルを押して案内を乞うた。出て來たのは大坪氏で、私の來るのを待ち設けて居たらしく、早速上れとのことであつたので、其の穢い下駄を廣い玄關の前にぬぎすてて、私は導かるゝまゝに、奥に通つて行つた。見るとそこの一つの廣い座敷に座布團が五枚敷かれてあつて、そこに私に通れとのことであつた。私は其の鞄の置き場所に一寸困つたが、其の手前の室の隅に一脚の卓子が置いてあつたから、其の上に乘せて、其の座布團の敷いてある座敷に通つた。座布團は床を背にして二枚、それに對して二枚、其の兩者の中間に障子を背にして一枚敷かれてあつた。其の障子を背にした一枚の上に、私に座れとのことであつたので、私は命ぜられるまゝにそこに坐つて、靜かに起り來ると

ころのものを待ち設けて居た。

軈て侯爵は一人で出て來られて、私の右手、卽ち床の間に對した方の座布團の上に坐られて、「今日は父や弟が、俳句の御話を伺ひたいといつて參つて居りますから、何かお話を願ひたい。」と言はれた。そこで私は初めて葵の紋のついた馬車が玄關にあつた意味を了解した。侯爵が父といはれるのは德川慶喜公に相違なかつた。弟といはれるのは誰のことであらう、慶久公のことであらうか、勝伯のことであらうか。私は少し事の意外に驚きながらも、それを否むわけにはゆかなかつた。

「少しもさういふ用意はして參りませんでしたけれども、それでは何か少しばかりお話をいたすことにいたしませう。」とお受けをした。そこへ二人現はれて來られたのは、招

勝伯　名は精、慶喜公の子、勝海舟の家を嗣ぐ。

魂社の行啓能の時であつたか、一度お見受けしたことのある慶喜公と、鼻下に薄く刈込んだ髭のある若い貴公子とであつた。侯爵の紹介によつて其の若い貴公子が慶久公であることがわかつた。此の公爵父子は一書生たる私に對して、極めて丁寧に挨拶されたので、私は座布團を滑り落ちて、極めて禮に嫻れない粗野な態度で挨拶した。仲博侯、慶久公は共に高位の人として、私はこれを認めることに吝なるものではないが、然し孰れも年齢は私よりも若くつて、同じやうな社會組織のもとに、同じやうな教育制度のもとに、育てあげられて來たものであるといふ感じが先にたつて、左程特別な感じを引起したわけでもなかつたが、獨りこゝに現はれて來られた德川十五代の將軍樣慶喜公其の人に至つては、不思議の感想にとざされずには居られなかつた。

招魂社　靖國神社のこと。

仲博侯や慶久公を前に置いただけならば、私は如何なる權威にも、如何なる階級にも支配されない一文學者虛子といふ者を、自ら振り返つて認めるのみであるが、此の慶喜公に至つては、松山藩の一小士、池内庄四郎の第四男たる自分の卑しい影を振り返らずには居られなかつた。私の父は私が小學校に通つてゐる頃、歷史で習つて來た話を人にしながら、德川家康と言つた所が酷くそれを叱つて、何故家康公と公の字をつけぬかと言つた。さうして、「己の生きてゐる間は、己の前で家康なぞと呼びすてにすることは許さぬ。」とつけ加へた。それからまた何彼につけても將軍樣の話などをして自分に聞かせた。其の中に「慶喜公」「慶喜公」といふ言葉も度々聞えた。父は京都か何處かで、一度慶喜公の眉目を遠望した事があつたのである。其も維新前の動亂當時だから出來たことであつたといふやうなことも話した。池内庄四郎は松山藩の一小士で、其の上に松平隱岐守といふ巨頭が山のやうに聳え、更に其の上に、量り知られぬ大きさの將軍樣といふものが、蔽ひ被さつて居たとすると、其の庄四郎の一子たる私が、其の將軍樣と膝を接して斯ういふ風に對坐するといふことは、殆ど夢のやうな事件としなければならぬのであつた。私は一應の挨拶を濟ませて對坐した時に、私が十八歲の時、六十六歲で死んだ父の事を思ひ出すまいと思つても、思ひ出さずには居られなかつたのも、道理あることであらう。殊に伊藤博文といひ、山縣有朋といふやうな維新史上著名な人も、現在の世の中に、多大の關係を持つてゐる所から、それを歷史上の人と考へるよりも、現在社會の人として考へる方に主な傾きがある。獨り、伊

伊藤　伊藤博文のこと。
山縣　山縣有朋のこと。

藤、山縣のみならず、西郷・大久保・木戸などと言つた所で、尙遠き史上の人としてこれを振返るよりも、寧ろ新しき今日の日本を作り出した人々として、餘程吾等に接近した人々のやうに、現在に引きつけて考へるのである。　それが一度此の慶喜公に至ると年齢は西郷、大久保、木戸などよりは若く、山縣、伊藤などゝ相如くといつてよい位なのであらうが、それで居て、私が小學校にゐる頃、日本歷史で讀んだ「德川慶喜大政を奉還す」といふ一句が、極めて強く頭に刻印されて、もうそれ以上慶喜公は舊い歷史の頁の中に葬られて仕舞つて、我等の生活してゐる現在の社會とは、何等の交渉もない人のやうに受取られてゐた。　其の慶喜公が、私から俳句の話を聞かうと、目の前に現はれ來つたといふことは、すくなからざる時の上の錯覺を引起して、夢みる如き心持を抑へることが出來なかつたのである。

俳話より前に、今奥の間で一同の作つた句稿があるから、先づ其の選拔をしてくれとのことであつたので、私は其の運座の句稿から若干の句を拔出した。　今其の時の句は大方は記憶に殘つてゐないが、

鳶の輪の下の小村や五月晴
灣めぐる赤禿山や五月晴

などゝいふのが、中で好い句であつたことだけ覺えて居る。さうして此の鳶の輪の句は慶久公の作であつたので、慶久公は戲れに鼻の先を叩いて自慢の表情をされると、仲博侯初め末座に控へて居た大坪氏其の他のお附の人は皆笑つた。　慶喜公はつゝましやかに微笑して居られた。　此の老いた父君の前に仲博侯でも、慶久公でも、總て如何にも無邪

氣な子供らしい態度をとつて居られたことが、私の眼に特に美しく映つた。　そんな打解けた心持のもとに、私は要求されるまゝに、其の選拔した句の批評などを試みた。　又選拔しない句の缺點を指摘したりなどした。　それが仲博侯や慶久公の句であると、互に顏を見合はして苦笑されたりした。　お附の人の中にも其の作者を知つてゐる人は皆笑つた。　そんな間も端然と坐つて少しの惰容もない中に、兒女も親しむことが出來るやうな溫顏をもつて慶喜公は、默つて私の批評を聽いて居られた。　私は其の句の批評を終ると共に、今度は古人の句などを引いて、俳句とはどんなものかといふことに就いて少し許り話をした。　其の中に蕪村の

牡丹切つて氣の衰へし夕哉

といふ句の解釋に及んだ時、公は深く感動された樣子で、「成程よく情をつくした、如何にも面白い句ですね。」と言はれた。さうして斯ういふことを附加へて言はれた。

「切らう〳〵と思ひながらも、切りかねて居たのを終に思ひきつて切つた、そこでがつかりした樣な氣の衰へを感じたといふ意味になるのでせうな。　たゞ夕暮に思ひたつて切つたといふのではなくて、朝から切らう〳〵と思つてゐたのを、夕ぐれになつて、漸く思ひきつて切つたといふ、そこの心持が面白い。」とぢつと首をかしげて咏嘆して居られた。

私はそれより前から私の拙い俳話のうちに時々言葉を挿んで反問される、其の公の明敏の頭腦にひそかに敬服して居つたのであるが、此の牡丹の句に就いての解釋の如きも、私の言葉の足らなかつた所を補はれた其の聰明に、唯々推

服した。　さうしてそれを聽いて居られた若い公侯は、父君が十二分の興味を私の拙い俳話に見出して居られるといふことを、心から滿足されてゐるやうに見えた。　老公の此の牡丹の句に對する深い〳〵　感動は、自ら一座の空氣を緊張せしめて、私の拙い俳話にも自然に魂の這入つた心持がした。

俳話が終つてから、

「お父様の五月晴の句はいかゞ遊ばされました」と慶久公は氣がついたやうに老公に尋ねられた。　老公はただ微笑して居られたが、慶久公や仲博侯の再三の勸めのもとに、終に一句を私に示された。　其の句は殘念ながら月並の句であつた。　此の十五代の將軍様に、特に俳句を御教授申上げた月並宗匠は一人もなかつたであらうけれども、德川末葉の月並調は、自然此の將軍様の上にも影響を及ぼして、其のたま〳〵　作られた五月晴の一句が、月並調であることも固より當然の事と考へねばならなかつた。　否十五代將軍としての老公が、なまじひ今日の新風の句を作られるよりも、月並の句を作られる方が、或意味に於て懷しみを持つてゐるやうにも考へられるのであつた。　然し其の句はもう今日の私の頭には記憶に殘つて居らぬ。

私は既に句を示された以上、如何に將軍様の句でも其の月並調を其の儘認めるわけには行かなかつたので、

「失禮でございますけれど、斯うお直しになつた方がよろしからうと考へます」と言つて次の通り紙に書いた。——私は「遊ばせ」といふ言葉をまだ使つたことが無かつたので使用しなかつた。

我が爲の五月晴とぞなりにける

老公は眼鏡をかけて居られなかつた。其の私の書いた小さな字を慶久公が傍から受取つて「我が爲の五月晴とぞなりにける」と朗吟して老公の顏を見上げられた。老公は眼を瞑つたまゝ、それを聞いて居られたが、聞き終つて後も默つて何とも言はれなかつた。仲博侯初め席上の人々が皆口の內で此の句を吟味しつゝ、一樣に老公の顏を視まもつたが、老公は矢張眼を瞑つたまゝで、何とも言はれなかつた。牡丹の句が老公の心を感動せしめたのと異つた意味で、此の瞬間一座の人の心持が又多少の緊張を覺えた。

俳句の話を切上げてから、席上は再び打解けた家族的の光景を現出した。仲博侯の奧方は大勢の御子樣達を引連れて出て來られた。さうして大坪氏等の立退いた席末の

方に坐られて、恰も軍隊が並んだやうに、奧方を左翼にして、多くの若君達や姫君達は、年齡順に並ばれて、一樣に私に挨拶をなされた。私は再び座布團から滑り落ちてお辭儀をした。

「さあ次は祖父樣に御挨拶をなさい。」といふ奧樣の命令のもとに、御子樣達は又一樣に頭を下げて老公にお辭儀をなされた。老公は何とか言はれながら樂しげに其の方を見やつて頭を下げられた。次に奧方と慶久公との間の御挨拶は極めて打解けた近代的のものであつた。

其の御挨拶が濟んでから、御子樣達は退散されて、奧方は仲博侯の次席の一枚空いてゐた布團の上に着席された。これより前、床前に敷かれた二枚の布團の上には、老公と慶久公とが着座されてゐたので、此の奧方の着座によつて初

め敷かれてあつた五枚の布團は一枚の空席もないことになつた譯である。そこへ女中は膳部を運んで來て、一番に私の前に据ゑた。將軍樣を差措いて、先づ私の前に膳部の置かれたことを、私はどこやら落着かぬことのやうに思つて、頗る恐縮したけれども、どうして好いんだか、禮式を心得ぬ私には何事もわからなかつたので、只其の儘にして愼んでゐた。次に老公から慶久公、仲博公、奥方と膳部が運ばれてから、一人の老女が席に侍してお酌をした。盃を取上げて二三杯傾けて居るうちに、老公は席を起たれて私の前に坐られて、

「先生、一つお酌を致しませう。」と言つて老女の手から銚子をとつて私に酌をされた。私は恐縮して半分座布團から滑り落ちながら將軍樣のお酌を有難く受けた。此の瞬間も松山藩の小身者池内庄四郎を思ひ出さずには居られなかつた。

それから老公は仲博侯や奥方や慶久公にもお酌をして席に復された。それから又主人役としての仲博侯も、同じやうに席を離れて酌をされた。かくなる上は私も亦お酌に起つべきものかと考へないではなかつたけれども、禮に嫺はざる野人が、なまじひ下手に出しやばるよりはと、たゞつゝましく差控へてゐた。

私が池田侯の邸を辭したのは、それから間もない事であつた。歴史の片影といふよりも、寧ろ歴史の大きな影が突如として私の前に現はれて來て、「牡丹切つて氣の衰へし夕哉」といふ句に深く感動し、「我が爲の五月晴とぞなりにける」といふ改作句には容易に首肯されなかつた老公の事など

を面白く思ひながら、私は彼の高利貸が持つ様な鞄を提げ、穢い下駄を突つ掛けつゝ月明の下に假事務所迄歩いて歸つた。牡丹切つて氣の衰へを感じたといふことが、果して大政を奉還した慶喜公の心の底の深い或物に觸れたのだと考へなくとも、また大政を奉還した後の心持が五月晴の句で言ひつくせたもので無かつたと言はなくとも、此の半日の將軍樣の面影は百卷の歷史を獵るよりも、より以上の維新史の或物を私に物語つたのであつた。

（高濱虛子著「十五代將軍」による）

アレキサンダー（B.C356－323）
秦始皇（B.C230－210）

八　アレキサンダー論

支那で誰が*アレキサンダーに當るか。時代の似てゐる所から言へば、*秦の始皇と、羅馬の*シーザーは互に相當るが、

シーザー（B.C100－44）
齊桓　春秋戰國時における齊の君、桓公。西紀七世紀頃の人。
晉文　春秋戰國時代における晉の君、文公。西紀前七世紀の人。
管仲　桓公の輔佐たりし人。

之に先んじて支那に如何なる英雄が出て居るか。聖人を標準にするだけ、アレキサンダーに匹敵するものが出て居らず、強ひて言へば齊*桓・晉*文と云ふ所であらう。桓公は躬自ら實力に富まず、功業は管*仲の手を以て遂げられたが、周領に權力を振ひ、國外に威力を伸ばした所、アレキサンダーの活動範圍に劣つて居らぬ。桓公と管仲とを合せば、武略に於てアレキサンダーに及ばず、治國の方に於て之に優る。支那に相應の英雄的人物が出て居ながら、兵力を以て經營するものがなく、兵力を以て經營しても、其の兵力は程の知れたものと思はれる。春秋戰國に於ては、盛に兵力を用ひる兵將が續出したが、アレキサンダーの獅子奮迅の勢あると同日に言ふことが出來ぬ。君主自ら兵を率ゐて活躍するは極めて稀で、戰爭好きといふのも將に出征を命ずるに

止まり、將は命を承けて出發し、敗北すれば嚴刑に處せられ、一の受負師たる形がある。馬上を以て天下を取るの最も目覺ましいのは、項籍*及び劉邦*であつて、支那の英雄らしい英雄は茲に始まる。

項籍　楚の王、劉邦と戰つて敗死す。西紀前三世紀末の人。

劉邦　漢の高祖。西紀前三世紀より二世紀に亘れる人。

記錄の傳へる限り、アレキサンダーは如何にも英雄らしい英雄と云へる。若し蓋世の雄を想像に描くとせば、自らアレキサンダーの如く男らしきものとなる。アレキサンダー・シーザーと並べ稱するけれども、快男子たる點に於て、シーザーに多くの缺點がある。アレキサンダーは三十四歲の元氣盛りで歿し、餘計な缺點を現さなかつた所もあり、或は短命で幸とも言へようが、兎も角も一生を通じて寸分の隙なきまでに、蓋世の雄たる俤を留めて居る。シーザーは之に較べて何處となく俗物と見え、大人物として、凡人の大なる者に屬する。

アレキサンダーは、天馬の昇りて空に行き、降りて地に走るが如く、何人にも手に汗を握らすやうな興味を覺えさせる所がある。項籍は武勇人に勝れ、又、人情に厚く、氣分のアレキサンダーに似た所はあるが、割合にさつぱりせぬ。心に蟠りがある。韓*信が言うたやうに、人の病氣を見て涙を流しながら、與ふべき物を惜んで與へず、餘り器局の大きい方でない。アレキサンダーは此の點に於て頗る綺麗で、ただ世界を斬從へるに力を致し、區區たる財寶や、土地の如きものは何とも思はぬ。廣大なる土地でも、人にくれてしまひ、頗るさつぱりして居る。力山を拔き、氣世を蓋ふと云ふは、實に彼の事である。

韓信　高祖の臣。

父なるフィリップは、夙に其の英才を認め、其の能く悍馬

を御するを見て曰つた、「我が領土は汝に取つて餘りに狹い。汝自ら新たに領土を得るの外はない。」と。　新たに領土を得るは其の頃の氣風であつて、アレキサンダーも唯之を念とし、有りと有らゆる國を悉く平げようと思ひこんだ。　父も遠征を志したが、暗殺されてしまひ、アレキサンダーは廿一歳で位に即き、國内の反抗を鎭壓し、隣國の背いたのを壓伏し、廿三歳で三萬五千の兵を率ゐ、ペルシャ征伐に出發し、屢寡を以て衆を破り、遂に全く征服するを得た。　運用の妙ばかりでなく勇敢にして陣頭に立ち、往々劍を拔いて敵と渡り合ひ、兜も鎧も傷だらけになる。　而も敵に對して徒らに殘虐を事とせず、王族の捕虜となつたのを待遇すること頗る宜しきを得、王ダリウス*も之を聞いて嗟嘆して曰ふに、「若し勝利を得れば、アレキサンダーの如く敵を取扱はう。　到

ダリウス　ペルシヤ王、ダリウス三世。紀元前三三六年から三三〇年まで在位。アレキサンダーに亡ぼさる。

底滅亡を免れぬならば、アレキサンダーの手に滅されて滿足する。」と。

アレキサンダーは後更に印度に遠征し、最早他に進むべき土地なきかと嘆息して兵を返した。　アレキサンダーは幾分ペルシャの奢侈に感染し、酒色に溺れた迹はあるが、常に自ら節制する事を忘れず、當時の風に比して、能く節し得た事を認めねばならぬ。　感情が強くて怒り易く、怒れば一刀の下に人を斬りたくなるのを、出來るだけ忍耐し最早耐へ切れなくなつて、癇癪玉が破裂する。　功臣クリトスが罵つた時、林檎を面に投付け、側の劍を取らうとし、周圍の人が仲に入つて頻りに詫びるので、氣を靜かにして柔らいだが、其の愈〻增長して、傍若無人の振舞をするや、槍を取つて一擊の下に刺し殺した。　殺して我に返り、槍を自身の咽喉に當

て左右に遮られて俯伏し、其の夜も翌日も、悲嘆の涙にくれ、之を慰めるには餘程の困難を感じた。多情多恨、ややもすれば情に馳せて止まる所なく、ただ自ら節制に努めて、其の甚しきに至らぬのである。感情も強いが意志も強い。千軍萬馬の間に起臥しつつ、政治に深く心を用ひ、死ぬる頃ペルシャの灌漑事業を思ひ立つて居つた。

歐洲の文明を西亞細亞に傳へ、印度の富を歐洲に知らしたのは、實にアレキサンダーであつて、平生我が位置のみを念とせず、其の死する時、誰に帝國を引渡すかとの問に對し、「最も適當の人物」と云ふに止まつた。英雄らしき態度は、アレキサンダー傳の何處にも附纏つて居る。

彼は感情が強過ぎはせぬか、英雄は喜怒哀樂を色に現はさぬが宜いではないか、時と場合とあるが、事々物々、一々打算し、利害得失を圖るに專らなるよりも豪快なる事を感じさせる。彼は猪突猛進するけれども、決して無謀の戰をせぬ。進むに臨んで必勝の算を立てる。直覺して勝敗を知り、其の直覺が滅多に誤らぬ。沈思冥想して複雜なる問題を解する能力を具へながら、大抵のことは即斷即決、何等惑ふところがない。熟慮せずして熟慮したと同樣の結果を得る。

アレキサンダーの如き人物は、支那には類を求め難く、日本の上杉謙信に似て、規模の大なるものと云ふが適當である。謙信は入道となつて冷かな所があるけれど、時に感激して殊更に困難を招くことがある。動員の兵數もアレキサンダーに讓らぬ。京都に攻め上らうとした時の兵は三萬五千位でなかつたかと思はれるが、何分にも百數十里の

活動で、距離を以て云へば甚だ狹い。謙信をしてマケドニアに在らしめたらば、アレキサンダーになつたであらう。共に狹氣に富み、利益を得るよりも、危險を冒すのを愉快とする迹がある。

危險を冒す性分は、アレキサンダーの遠い親類にあたるエペイロス王ピルロスに於て著しく現はれて居る。ピルロスはアレキサンダーに私淑し、アレキサンダーが東に進んだ代りに、西の方羅馬及び其の他を併せようとした。歩兵二萬三千、象若干頭を率ゐて出帆し、南伊太利で羅馬兵と戰つて勝ち、羅馬城へ七八里の處まで進んだが、數回の激戰で自ら兵を損すること多く、引きつゞいて追擊する譯にいかなかつた。其の後或はカルタゴと戰ひ、或は羅馬と戰ひ、遂に利なくしてエペイロに歸り、マケドニアと戰つてこれに勝ち、更にスパルタと開戰し、アルゴスに進んで四十七歳で戰死した。羅馬は波斯より強く、アレキサンダーのごとく連戰連勝するを得なかつたが、冒險の氣象に富むことは更に超えて居り、用兵の術に於ては孰れが優つて居るか言ひ難い。若し西歐に勝利をつゞけ得たならば、アレキサンダーと並び稱せられるのである。それでなくても、戰史の上で並べ稱する價値がある。

（三宅雄二郎著「東西英雄一夕話」による）

エペイロス　古代に於てギリシヤの北部にありし地。

ピルロス　紀元三一八年頃生れ、同二七二年戰死。

カルタゴ　フエニキア人の植民地。アフリカの北岸地中海に臨める處にあり。フエニキア衰ふるや次第に勢力を得、西紀前六〇〇年頃には諸植民地を統一して聯邦を作れり。

スパルタ　古代に於てギリシヤの南部にありし地。

九　焚き火

北風を背になし、枯草白き砂山の崖に腰かけ、足なげだして、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつゝ、沖より歸る父の舟遲しと待つ逗子邊の童の心、その淋しさ、うら

御最後川　逗子と葉山との間にあり。田越川ともいふ。平維盛の子六代御前此所にて斬られたり。

六代御前の杜　御最後川の左岸にあり。

悲しさは如何あるべき。御最後川の岸邊に茂る葦の枯れて、吹く潮風に騒ぐ其の根がたには、夜半の滿潮に人知れず結びし氷、朝の退汐に破られて殘り、ひねもす解けもせず、夕闇に白き線を水際に引く。若し旅人、疲れし足を此の渚に停めしとき、何心なく見廻して、何等の感もなく行過ぎ得べきか。見かへれば彼處なるは、哀れを今も、七百年の後にひく六代御前の杜なり。木がらし其の梢に鳴りつ。

落葉を浮べて、ゆるやかに流るゝ此の沼川をこぎ上る舟、知らず何れの時か、心地よき追分の節面白く、此の舟より響き渡りて、霜夜の前ぶれをか爲しつる。あらず、あらず、たゞ見る、何時もく、物言はぬ、笑はざる、歌はざる漢子の、農夫とも漁人とも見分け難きが、淋しげに艪をあやつるのみ。

鍬かたげし農夫の影の、橋と共に朧ろに此の水に映る。

あぶずり　逗子御最後川との間にあり。小丘海に迫る。

かの舟、音もなくこれをかき亂しゆく。見る間に、舟は葦がくれ去るなり。

日影なほあぶずりの端にたゆたふ頃、川口の淺瀨を村の若者二人、はだか馬に跨りて靜かに歩ます、畫めきたるを見ることもあり。かゝる時、濱には見わたす限り、人らしきものゝ影なく、引上げし舟の舳に止まれる鳥の、聲をも立てゞ、翼打ものうげに鎌倉の方さして飛びゆく。

或年の十二月末つ方、年は迫れども、童は何時も氣樂なる風の子、十三歳を頭に、九つまで位が七八人、砂山の麓に集まりて、何事をか評議まちく。立てるもあり。砂に肱を埋めて、頰杖つけるもあり。坐れるもあり。此の時日は西に入りぬ。

評議の事定まりけん、童等は思ひく に波打際を駈けめ

ぐり始めぬ。入江の端より端へと、おのがじゝ、見るが間に分れ散れり。潮遠く引きさりしあとに殘るは、朽ちたる板、緣缺けたる椀、竹の片、木の片、柄の折れし柄杓などの色々、皆一昨日の夜の荒れの名殘なるべし。童等は一々此等を拾ひあつめぬ。集めて之を水際を去る程よき處、乾ける砂を選びて積みたり。つみし物は悉く濡ひ居たり。

此の寒き夕まぐれ、童等は何事を始めたるぞ。日の西に入りてより程經たり。箱根・足柄の上を包むと見えし雲は黃金色にそまりぬ。小坪*の浦に歸る漁船の、風落ちて陸近ければにや、帆を下し漕ぎゆくもあり。

からす碎け失せし鏡の額緣めきたるを拾ひて、これを燒くは惜しき心地すといふ兒の丸顏、色黑けれど愛らし。されど其は必ず能く燃ゆと、此の群の年かさなる子、己が力に

小坪の浦　神奈川縣三浦郡田越村にあり。鎌倉材木座の飯島崎の南。

餘る程の太き丸太を置きつゝ言へり。「其の丸太は燃えじ。」と丸顏の子いふ。「いな燃さで置く可き。」と年上の子いきまきて立ちぬ。傍に一人、今日は獲ものゝ何時になく多き樣なりと、喜ばしげに叫びぬ。

童等の願ひは是等の獲物を燃さんことなり。赤き炎は彼等の狂喜なり。走りて之を躍り越えんことは互の誇りなり。されば彼等このたびは砂山の彼方より、枯草の類を集め來りぬ。年上の子、先に立ちて、此等に火をうつせば、童等は丸く火を取りまき立ち、竹の節の破るゝ音を今か〳〵と待てり。されど燃ゆるは枯草のみ。燃えては消えぬ。煙のみ徒にたちのぼりて、木にも竹にも火は容易く燃えつかず。鏡の枠は僅かに焦げ、丸太の端より怪しげなる音して湯氣を吹けり。童等は交る〳〵砂に頭押しつけ、口を尖

らして吹けど、生憎に煙眼に入りて、皆の顔は泣きたらんごとし。

沖は早暗うなれり。江の島の影も見わけ難くなりぬ。干潟を鳴きつれて飛ぶ千鳥の聲のみ聞えて、彼方此方ものさびしく、其の姿見えずと見れば、夕闇に白きものはそれなり。あわたゞしく飛びゆくは鳴かの葦間よりや立ちけん。此の時一人の童、忽ち叫びていひけるは、見よや〳〵、伊豆の山の火はや見えそめたり。如何なれば我等が火は燃えざるぞと。童等は齊しく立上りて沖の方を打ちまもりぬ。げに相模灣を隔てゝ、一點二點の火、鬼火かと怪しまるゝばかり明滅し、動搖せり。これ正しく伊豆の山人、野火を放ちしなり。冬の旅人の日暮れて途遠きを思ふ時、遙かに望みて泣くは實に此の火なり。

伊豆の山燃ゆ、伊豆の山燃ゆと、童等節面白く唄ひ、沖の方のみ見やりて手を拍ち、躍り狂へり。あはれ此の罪なき聲、たそがれ時の淋しき濱に響き渡りぬ。私語く如き波音、入江の南の端より白き線立て走り來り、これに和したり。潮は滿ちそめぬ。

此の寒き日暮に何時までか濱に遊ぶぞと呼ぶ聲、砂山の彼方より聞えぬ。童の心は伊豆の火の方にのみ馳せて、此の聲を聞くもの無かりき。歸らずや、歸らずやと、二聲三聲引續きて聞えけるに、一人の幼き兒、聞きつけて、母呼びたまへり、最早打捨て歸らんと言ひ、忽ち彼方に走りゆけば、殘りの童等また、さなり〳〵と呼びつゝ、競うて砂山に駈けのぼりぬ。

火の燃えつかざるを口惜しく思ひ、かの年かさなる童の

みは、後振りかへりつゝ馳せゆきけるが、砂山の頂に立ちて、將に彼方に走り下らんとする時、今ひとたび振向きぬ。ちらと眼を射たるは火なり。こは如何に、われらの火燃えつきぬと叫べば、童等驚き怪しみ、たち返りて砂山の頂に集まり、一列に並びて此方を見下しぬ。

げに今まで燃えつかざりし拾木の、忽ち風に誘はれて火を起し、濃き煙うづまき上り、紅の炎の舌見えつ隠れつす。竹の節の裂るゝ音聞え、火の子舞ひたちぬ。火は正しく燃えつきたり。されど童等は最早此の火に還ることをせず、たゞ喜ばしげに手を拍ち、高く歡聲を放ちて、一齊に砂山の麓なる家路の方へ馳下りけり。

今は海暮れ濱も暮れぬ。冬の淋しき夜となりぬ。此の淋しき逗子の濱に、主なき火はさびしく燃えつ。

忽ち見る、水際をたどりて、火の方へと近づき來る黑き影あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡りて濱に出で、濱傳ひに小坪街道へと志しぬるなり。火を目がけて小走りに歩む、其の足音重し。

嗄れし聲にて、よき火やと幽かに叫びつ。杖なげ捨てゝいそがしく脊の小包を下し、兩の手を先づ炎の上にかざしぬ。其の手は震ひ、其の膝はわなゝきたり。げに寒き夜かな。言ふ齒の根も合はぬが如し。炎は赤く其の顏を照らしぬ。皺の深さよ。眼いたく凹み、其の光は濁りて鈍し。頭髮も髯も胡麻白にて塵にまみれ、鼻の先のみ赤く、頰は土色せり。あはれ何處の誰ぞや。指してゆくさきは何處ぞ。行方定めぬ旅なるかも。

げに寒き夜な。獨りごちし時、總身は心ありげに震ひぬ。

斯くて煖まりし掌もて心地よげに顏を摩りたり。いたく古びて、所々古綿の現はれし衣の、火に近き裾のあたりより湯氣を放つは、朝の雨に霑ひて、なほ乾すことだに得ざりしなるべし。

あな心地よき火やと言ひつゝ、投げやりし杖を拾ひて、これを力に片足を揚げ、火の上にかざしぬ。脚絆も足袋も、紺の色あせたり。血色なき小指現はれぬ。一聲高く竹の裂るゝ音して、勢よく燃上りし炎は、足を焦がさんとす。されど翁は足を引かざりき。

げに心地よき火や、たが燃しつる火ぞ、忝なし。言ひさして足を替へつ。十とせの昔樂しき爐見捨てぬるよりこのかた、未だこの樣なるうれしき火に遇はざりきといひつゝ、火の奥を見つむる目なざしは、遠きものを眺むるが如し。

火の奥には過ぎし昔の爐の火、昔のまゝに描かれやしつらん。鮮かに現はるゝものは兒にや孫にや。昔の火は樂しく、今の火は悲し。あらず、あらず、昔は昔、今は今、心地よき此の火や。いふ聲は震へぬ。荒々しく杖を投げやりつ。火を脊になし、沖の方を前にして立ち、體をそらせ、兩の拳もて腰をたゝきたり。仰ぎ見る大ぞら、晴れに晴れて黑ずみ、星河霜をつゝみて、遠く伊豆の岬角に垂れたり。

身も煖くなりゆき、ひぢたる衣の裾も袖も乾きぬ。あゝ此の火、誰が燃やしつる火ぞ。誰が爲にとて、誰が燃やしつるぞ。今や翁の心は感謝の情にみたされつ。老の眼は涙ぐみたり。風なく波なく、さし來る潮の、しみ〴〵と砂を浸す音を、翁は眼閉ぢて聽きぬ。さすらふ旅の憂も此の刹那にや忘れはてけん、翁が心、今一たび童の昔にかへりぬ。

あはれ此の火、やうやうに消えなんとす。竹も燃盡き、板も燃盡きぬ。かの太き丸太のみは猶良く燃えたり。されど翁は最早これを惜しとも思はざりき。たゞ立去り際に名殘惜しくてや、兩手もて輪をつくり、抱く樣に胸のあたりまで火の上にかざしつ。眼しばたゝきてありしが、いざと許りに腰うちのばし、二足三足ゆかんとして立ちかへれり。燃えのこりたる木の端々を搔集めて火に加へつ。勢よく燃上るを見て心地よげに打笑みぬ。

翁のゆきし後、火は紅の光を放ちて、寂寞たる夜の闇のうちに覺束なく燃えたり。夜更け、潮みち、童等が焚きし火も、旅の翁が足跡も、永久の波に消されぬ。

*（國木田獨歩著「獨歩全集」に據る）

國木田獨歩　小說家。明治四十一年歿。

生前一杯の酒　白樂天の詩に曰く、身後堆金柱北斗、不如生前一杯酒。

蝸牛角上云云　莊子則陽篇に曰く有國於蝸之左角者曰觸氏。有國於蝸之右角者曰蠻氏。時相與爭地而戰。

石火光中　新論に曰く、人之短生、猶如石火。

一〇　人生終に奈何

人生終に奈何、これ實に一大疑問にあらずや。生きて回天の雄圖を成し、死して千歳の功名を垂る、人生之を以て盡きたりとすべきか。予甚だ之に惑ふ。生前一杯の酒を樂しむ、何ぞ須ひん身後千載の名。人は只行樂して已まんか。予甚だ之に惑ふ。蝸牛角上に何事をか爭ふ、石火光中に此の身を寄す。人は只無常を悟つて終らんか。予は甚だ之に惑ふ。吁人生終に奈何。將人は只死するが爲に生まれたるか。嘗て一古寺に遊ぶ。檐朽ち柱傾き、破壁摧欄、僅かに雨露を凌ぐ。環堵廓然として、空宇人を絶ち、芒々たる萋草晝尙暗く、古墳累々として其の間に横たはれるを見、猛然として悟り、喟然として嘆ず。吁天下心を傷ましむる、斯の

如きものあるか。借問す、これ誰が家の墳ぞ。弔祭永く至らず、墓塔空しく雨露の爲に朽つ。想ふに其の生まれて世に在るや、冲天の雄志躍々として禁ふる能はず。天下を擧げて之に與ふるも、心慊焉たらざりしものも、一旦魂絶えて身異物となれば、苔塔墓陰、盈尺の地を守つて、寂然として聲なし。人生の空然たる哀しむべきの至ならずや。後人碑を建て之に銘するは、其の心素より其の英名を不朽に傳へんとするにあり。然れども、星遷り世變り、之が洒掃の勞を取るの人なく、雨雪之を碎き、風露之を破り、今や塊然として土芥に委するも、人絶えて之を顧みず、先人の功名得て而して傳ふべきなし。思一たび此に至れば、彼の廣大なる墓碑を立てゝ、名の不朽を願ふものは、何等の痴愚ぞや。嗚呼劫火炯然として一たび輝けば、大千俱に壞す、天地又何の常か

劫火　仁王般若經に曰く、劫火炯然、大千俱壞

これあらん。想ふに彼の功業を竹帛に止めて、盛名の窮りなきを望むものは、其の痴之に等しきを得んや。悟れ一瞬の須臾なるも千歳の久しきも、天地の無窮なるに比すれば等しく是一刹那なるにあらずや。名其の死と共に滅するも、死後千年を經て亡ぶるも、其の終あるに至つては一なり。人生を此の世に享け、此の一時の名を希ふ、五十年の目的遂に之に過ぎざるか。予甚だ之に惑ふ。功名朝露の如し、賴むべからず。人生終に奈何。藐然として流俗の毀譽に關せず、優游自適其の好む所に從ふ。樂は卽ち樂なりと雖も、蟪蛄草露に終ると孰れぞや。栖々遑々、時を匡し道に順ひ、仰いで鳳鳴を悲しみ、俯して匏瓜を嘆ず、之を估りて售れざらんことを恐れ、之を藏めて失はんことを憂ふ。これ正は卽ち正なりと雖も、寧ろ鳥獸の營々として走生奔死するに

と、劫火は世界破滅の時の火なり。大千は大千世界なり。佛說によれば、四大洲日月諸天を合して一世界となし、之を小千世界といふ。小千世界の千倍を中千世界、中千世界の千倍を大千世界となす。

蟪蛄　莊子逍遙游篇、蟪蛄不知二春秋一とあり。

鳳鳴云々　論語微子篇に、鳳兮鳳兮、何德之衰とあ

り。又陽貨篇に、吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食、とあり、又子罕篇に、沽之哉沽之哉、我待賈者也とあり。

劉子　七賢中の劉伶なり。酒をたしなみ、醉侯と稱せらる。

夸父日を追ふ　山海經に曰く上古人名、不量力、欲追日影、逐之於暘谷、渴而死。

南華　莊子の別名、書名莊子を南華眞經ともいふ。

四諦　四諦とは苦（生老病死）集（聚骨肉財産）滅（壞滅）道（修行）をいふ。

身を觀ず云々　和漢朗詠集の句に曰く、觀身岸頭離根草、論命江頭不繫船。

高山林次郎　樗牛と號す。文學博士、哲學者。明治三十六年歿。（一八七一―一九〇二）

等しきなきか。光を含み世に混じ、劉子の流を汲みて濁醪一引、俯して萬物の擾々焉たるを望むは、快は卽ち快なりと雖も、醉生夢死草木と何ぞ擇ばん。吁、人は空名のために生れたるか、將行樂せんがために生れたるか。果して然らば、これ夸父日を追ふの痴を學ぶにあらざれば、禽獸草木と其の命を等しうせんとするものなり。予甚だ之に惑ふ。南華老人は言へらく、大覺ありて其の大夢なるを知ると。佛氏は諭すらく、離慾の寂靜は四諦を悟る所以なりと。已めよ、若し人生を以て夢となさば、迷へるも悟れるも等しくこれ夢にあらずや。縱ひ身を觀じて岸頭籬根の草とし、命を論じて江邊不繫の船となすも、期する所は一の墓門にあらずや。生前の事業夢中の觀の如く、死後の名聞草露の如くんば、茫然たる吾が生それ何くにか寄せん、大哀と謂はざるべけんや。嗚呼人生終に奈何。予往を顧み來を慮り、半夜惘然としてわれ我を喪ふ。（高山林次郎著「樗牛全集」に據る）

改訂現代讀文本　卷四　終

大正六年九月廿六日印刷　大正七年四月十八日再版發行
大正六年九月廿九日發行　大正九年十月廿五日改訂印刷
大正七年四月十五日訂正印刷　大正九年十月廿八日改訂三版發行
大正十年一月九日訂正印刷
大正十年一月十二日訂正四版發行

定價	
卷一	金參拾參錢
卷二	金參拾參錢
卷三	金參拾五錢
卷四	金參拾六錢
卷五	金參拾五錢

大正十二年度臨時定價	
卷一	金五拾六錢
卷二	金五拾六錢
卷三	金六拾錢
卷四	金六拾壹錢
卷五	金六拾錢

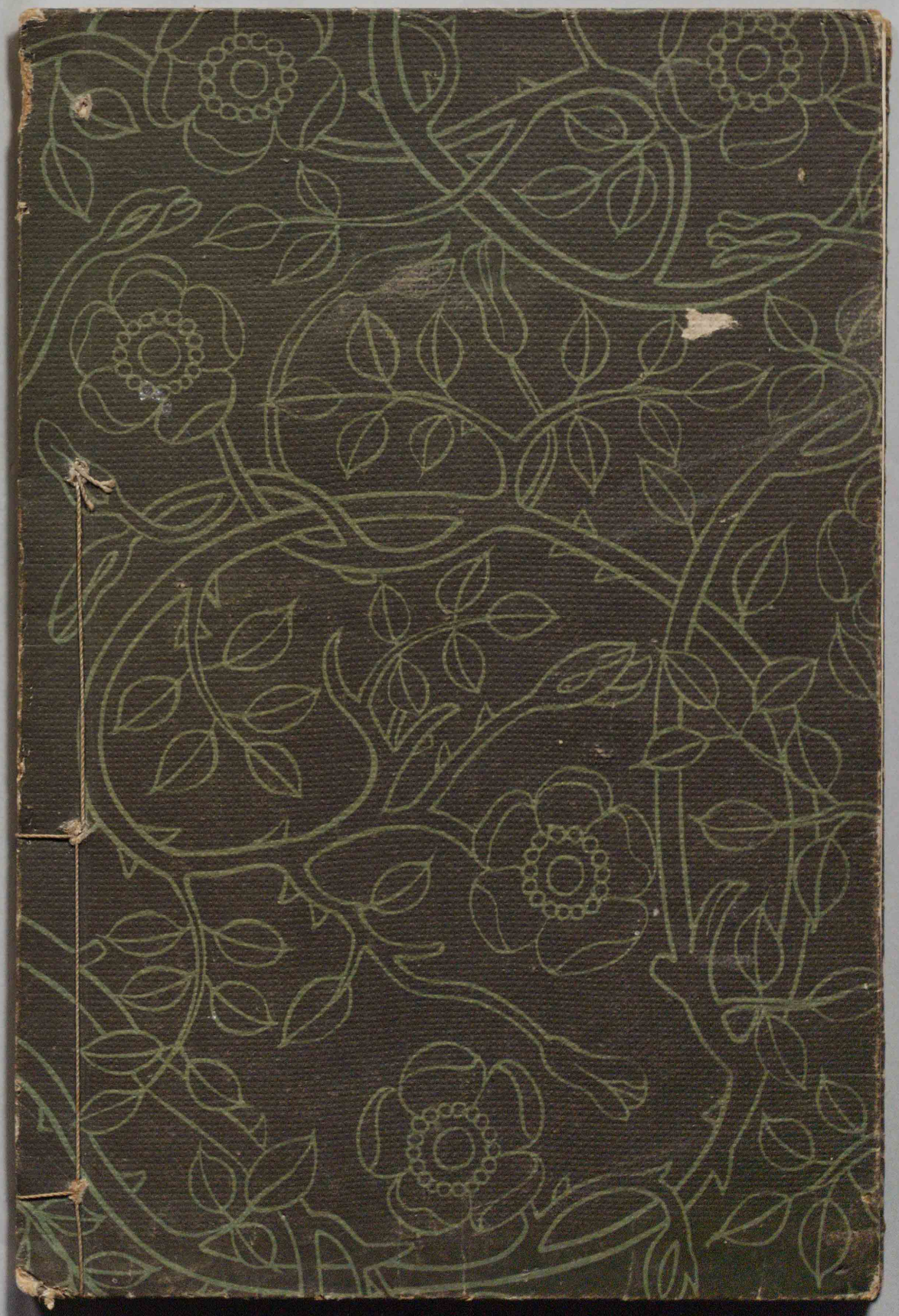
著作權所有

現代文讀本（改訂）

編纂者　東京高等師範學校附屬中學校內　國語漢文研究會

發行者　東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地　目黑甚七

印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁

發行所　東京市京橋區南傳馬町二丁目
新潟縣長岡市表四ノ町（本店）
目黑書店
【東京】電話京橋二一六三番　振替口座二八〇九番
【長岡】電話長岡一八番　振替口座三六一九番

（印刷所　三秀印刷株式會社）